

平成22年
2010

第7号

東京学芸大学全国同窓会機関誌



辟雍

HEKIYOU

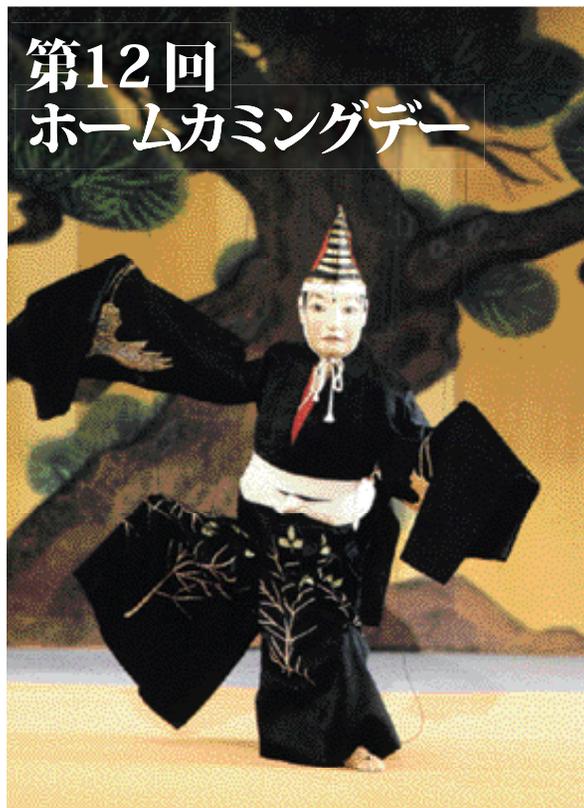


平成生まれ、教壇へ羽ばたく。

教育実習を附属世田谷小で定点観測「実習生たちは何を見、何をし、どう変わったか」



第12回 ホームカミングデー



特別公演 結城座





「辟雍会」設立の趣旨

二十一世紀を迎え、政治・経済・文化などのさまざまな領域で、急激な変革が生じています。教育もその例外ではなく、生活環境・家族環境、学習環境などの変容に対応して、変革が迫られてきています。

こうした状況にあつて、日本の教員養成系大学の中核に位置する東京学芸大学は、教育のあり方全般に対して、重い責任と義務を自覚せざるを得ません。

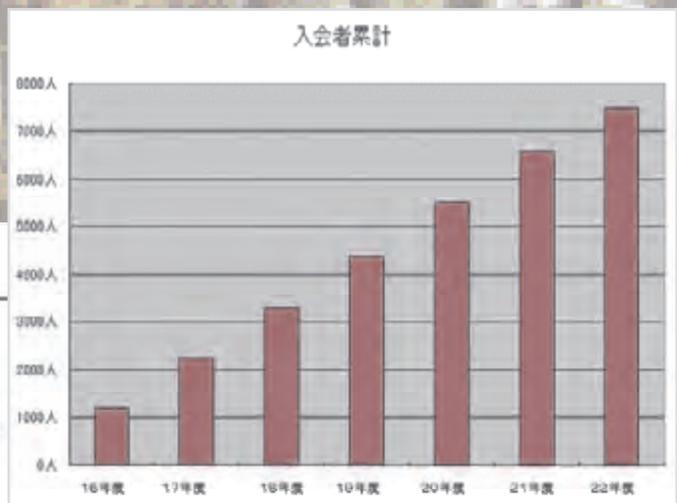
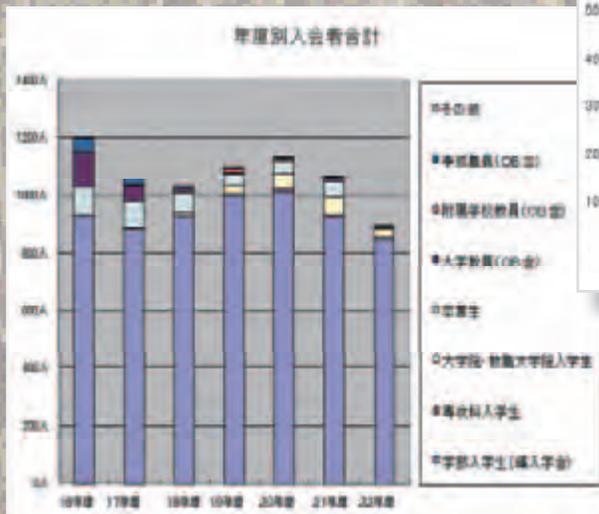
東京学芸大学は、平成11年5月に創立50周年を迎え、これまでに多くの卒業生を輩出してきました。現在活躍されている卒業生の方々は、現在の日本の社会を強く支えており、また広範な経済・文化・学芸領域での活動に大きく寄与してきました。特に、教師となられた卒業生の方は日本の広い地域、市区町村で教育・文化活動を着実に支えてきました。このことを考えますと、東京学芸大学の学生・教職員の力と、卒業生の実績、その力を合わせるることによって、教育・経済・文化・学芸領域で、新しい課題を提案し、創造的解決を提供することが可能になることが予想されます。

新しい世紀では、学校教育はもとより社会のさまざまなステージでの生涯学習の充実が期待されています。地域・職域を越えた新しい「全国同窓会」の存在は、個人と大学、個と社会を結ぶ絆としてのみならず、大学と社会を結ぶものであり、教育や生涯学習、文化環境などに関する情報の関連な流通は、平成16年4月より発足する国立大学法人東京学芸大学と卒業生にとつても、また社会にとつても、意義ある成果をもたらすものと考えます。

新しい教育・文化の展開の一翼を積極的に担って行くことを目指して、ここに、辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）を設立します。

二〇〇三年十一月三日

会員数の推移



辟雍第七号 目次

会長挨拶

「辟雍会を大学と同窓生の情報の交差点に」 鷲山恭彦…………… 04

特集 ホームカミングデー特別公演 「結城座」…………… 06

演目紹介

江戸糸あやつり人形の歴史

「結城座」とは

十二代目座長 結城孫三郎氏に聞く

大宅壮一ノンフィクション賞受賞

「逝かない身体」の川口有美子氏に聞く…………… 12

北海道「環境授業」報告 小森伸一准教授…………… 16

教育実習を附属世田谷小で定点観測

「実習生たちは何を見、何をし、どう変わったか」…………… 20

対談 「特別支援教育」に求められるもの

臼木信子氏×澤隆史氏…………… 26

対談 「美術教育」とは何か

古瀬政弘氏×岩越敦彦氏…………… 30

報告 「広告小学校」の取り組み 中村和弘准教授…………… 34

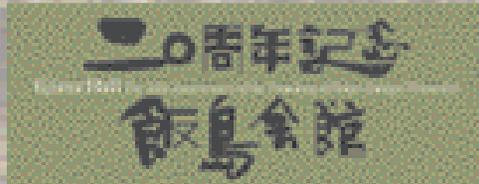
平成二十二年度理事会報告…………… 38

新しい都道府県支部の設立に向けて 組織部…………… 40

役員紹介 臼木信子、丹伊田敏、山本一雄、黒石陽子 各副会長

金子義和幹事長…………… 41

編集後記…………… 45



20周年記念飯島記念会館。この二階に辟雍会の事務所があります。

会長挨拶

辟雍会を大学と同窓生の情報の交差点に

辟雍会（全国同窓会）会長 鷺山恭彦

本年は、東京学芸大学が創立されてから星のめぐりが一巡して、いよいよ新たな61年目を迎えました。

次の60年に向けた、新しい出発の年に当たります。

そして法人化と軌を一にして誕生した辟雍会も、

6年の経験を積み上げて、更なる飛躍が求められる時を迎えています。

入学と同時に辟雍会に入った「辟雍1期生」も、

既に社会に飛び立ち、それぞれの職場で活躍を始めています。

この4月には7期生が入会してきました。

こうした卒業生や会員の皆さんの活動が、

大学との繋がりの中で、さまざまな形で豊かに発展していくことは、

21世紀「知識基盤社会」の要諦であり、

辟雍会はその中心になっていかなければなりません。

まず、卒業生の皆さんに、大学の情報を発信することが必要です。

大学のホームページが充実しておりますが、辟雍会もホームページを通じて、



会の活動を軸にした大学の情報を豊かに発信していきたいと思ひます。

創立以来60年、卒業生は既に6万人を超えています。

卒業生の皆さんは、全国の教育の現場で次世代を担う子供たちの教育に携わり、

あるいは第一次から第三次までのあらゆる産業の分野で多彩な活躍を展開しています。

大学の情報と共に、こうした卒業生の皆さんから、社会の生きた情報を寄せていただき、

この辞雍会を、多様で生産的な交流の交差点にしたいと考えています。

その交差点のあり様をさらに緊密にしていくために、

都道府県ごとに支部を確立し、その支部を中心に各地域での情報交換、

親睦交流の網の目を密にしていくことが肝要です。

現在、高知、青森、岩手、千葉、石川、富山、島根、北海道において

支部活動が始まっていますが、新潟、鳥取、静岡、大分が続こうとしております。

この輪はさらに広げていきたいと思っております。

情報発信を通じた大学との豊かな交流、卒業生の皆さんの活動紹介、

支部活動の確立と強化を、今後の主要目標としたいと思っております。

大学の正門を入ってすぐ左側に「20周年記念飯島同窓会館」という2階建ての建物があり、

その2階に辞雍会事務所があります。

林静代、大沢一美が常駐して、皆さんの来訪をお待ちしております。

来学の際には是非ともお立ち寄りください。



特集「結城座」



第12回 ホームカミングデー特別公演 結城座

2010年11月20日 土曜日

十一月二十日はホームカミングデーである。今や日本中のほとんどの大学で行われている行事だが、東京学芸大学の場合は、今年が数えて十二回目だ。一九九九年（平成十一年）、東京学芸大学の創立五十周年を記念して始まった。謂わば、五十周年記念行事の一つであった。辟雍会は二〇〇三年（平成十六年）、設立と同時に大学と共同開催という形で、この行事に参加した。以来、七年目を迎えた。

思えば、二〇〇四年は、アテネオリンピックが開催された年であった。そのオリンピックに東京学芸大学の卒業生二人が参加した。陸上女子八百メートルの杉森美保さんとビーチバレーの楠原千秋さん、そしてもうひとつ前のシドニー五輪には森本朱美さんが自転車競技で参加していることもわかった。そこでこの年のホームカミングデーには、このオリンピック代表選手を母校に招いて（杉森さんはビデオによる参加）、「オリンピックに出場して」という題で座談会をしていただくという催しを行った。

以来、演奏会や講演会など多彩な企画を重ねてきた。

そして、今年も江戸糸あやつり人形の「結城座」公演である。結城座は別掲の通り、江戸初期から三百七十五年も続く伝統芸能を今に伝える貴重な一座であり、存在そのものが文化財である。ご存知の方もあろうが、結城座は大学のお隣さんなのだ。劇団の事務所、稽古場は、大学の東側を通る新小金井街道を北上した中大高校の筋向いにある。そんな誼から出演依頼をしたところ、結城孫三郎座長に快諾していただいた。「未来を担う子供たちを育てる教員養成の大学で、ぜひ公演したい」といわれたのだ。ホームカミングデーは卒業生が母校に帰る日、という意味ではあるが、同時に地域に根差して、地域の方々とも交流を深める、という意味も併せ持つ。その意味でお隣さんの結城座に来演していただくのは、なんともうれしいことである。

そこで、機関誌「辟雍」七号の巻頭特集は「結城座」とした。結城座の紹介、座長へのインタビュー、公演内容の紹介など、プログラムの要素も含めた。どうか、この機関誌を片手に、結城座の公演をご覧いただきたい。

演目の紹介

■江戸糸あやつり人形の歴史と構造、遣い方のレクチャー
体験コーナーあり(約三十分)



■三番叟(さんばそう)

古くは神事として舞われたこの踊りには、色々と意味を持った動きが使われています。「出遣い(でつかい)」で人形を遣っている様子もご覧いただけます。(約七分)

■寿獅子(じゆざきごし)

お正月、お祭りの時などに舞われるお獅子の舞です。のどかな獅子、蝶を追う獅子、逃げられて怒り狂う獅子、人形ならではの動きをお楽しみください。(約五分)



■千人塚(せんになづか)

江戸の小唄より、ユレイがお坊さんをおの世に遣つれにしようとはしますが、はたして……劇中に出てくる、古くから伝わる技法「骨寄せ(こつよせ)」という、仕掛けの人形も見所です。(約十五分)



■杜子春(とししゆん)

無一文の杜子春の前に現れた老仙人に、杜子春は弟子入りを志願します。仙人は杜子春に様々な試練を与えます。

芥川龍之介の名作を、繊細で躍動感あふれる糸あやつり人形でお楽しみください。(約三十分)



公演は十一月二十日(土)
午後三時から。
芸術館ホールで行われます。
入場は無料です。

江戸糸あやつり人形の歴史

結城座は、江戸時代の寛永十二年（一六三五年）に

初代結城孫三郎が江戸の葺屋町に旗揚げ以来、

現在の十二代結城孫三郎まで約三百七十五年の歴史を持つ、

日本唯一の伝統ある糸あやつり人形劇団です。

昭和三十一年に東京都の無形文化財に認定され、平成八年には

国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」にも選定され、

さらに、結城座および故・結城雪斎の活動に対し、

芸術祭文部大臣賞、東京都知事賞、紫綬褒章、勲四等瑞宝章、

文化財功労者賞等が贈られています。

世界各国での公演も成功をおさめ、国内外で高い評価を得ています。

平成二十一年十二月から、

公益財団法人江戸糸あやつり人形結城座として座を運営し、

江戸糸あやつり人形の継承、普及、発展に努めています。



「結城座とは」

結城座は江戸時代より三百七十五年余り続く伝統ある「江戸系あやつり人形」と二百年余りの歴史を持つ「江戸写し絵」を受け継ぎ、

今日、この伝統文化を多くの皆様と享受してこそ、

現代での生きた文化として発展させ得ると考えております。

この地道な活動は、ややもすれば変化とスピードの激しい時流の中で、片隅に追いやられてしまう危機感を持たざるを得ません。

日本人が風土の中で育んだ独自性を持ち、それが現代の中で瑞々しく息づいてこそ、次世代へ継承されていくものと確信しております。

その為に、私は後継者の育成に全力を注いで参ります。

殊の他、先人たちの知恵と技術で大切に育まれた『古典』作品には、心血を注ぐ覚悟でおります。

果敢に臆することなく『新作』にも挑み続け、

わが国の誇る伝統文化の更なる発展に尽くして参ります。

公益財団法人 江戸系あやつり人形 結城座
理事長 田中克昌（十二代結城孫三郎）



「江戸写し絵」とは

十九世紀初頭にオランダより入ってきたものが、日本独自の「風呂」と呼ばれる特殊な手持ちの幻燈機を使う「うつしえ」として日本中に広まりました。結城座では「演じる絵」「物語る絵」として活躍しています。

第十二代 結城孫三郎氏に聞く

座長・結城孫三郎さんは江戸初期から続く江戸系あやつり人形の結城座を現代に伝え、育てる十二代目の当主である。その立場と思いのほどは、九ペー
ジの「結城座とは」に自らの言葉として認められているが、ここでは改めて十二代目個人の来歴、そして今回のホームカミングデー記念公演への思いのほどを東京学芸大北側の貫井北町三丁目にある結城座稽古場で伺った。

——こちらに伺う前にインターネットのウィキペディアを覗いてみたのですが、「初代は一六三五年に江戸で説教師の人形芝居結城座を開いた。後に義太夫の系操り人形芝居興行を行った」と一行で説明され、「二代目から八代目までは不明な点が多い」とも書かれています。改めて結城座の歴史を教えてください。

結城 寛永年間に当時芝居小屋がたくさん集まっていた葺屋町（現在の日本橋人形町一、二丁目周辺）で旗揚げしました。義太夫の説教師を操り人形で演じるもので、文楽とはまた違った趣で人気があったようです。それからおよそ二百年

間、この日本橋にあったのですが、水野忠邦の天保の改革によって、日本橋の芝居小屋がすべて浅草の猿若町に移住させられたのに伴って、結城座も浅草・猿若町に移ります。世間に猿若三座と呼ばれた市村座、中村座、守田座と通りを挟んだ東側に小屋を構えていました。系操り一座は、結城座の隣に薩摩座があって、人気を二分していたようですが、明治になって薩摩座の方はつぶれてしまいました。

——伺えば、かの市川団十郎の登場よりも五十年近くも古いんですね。一口に三百七十五年といいますが、江戸、明治、大正、昭和、平成と受け継いでこられたとは、すごいことですね。これだけ続いてきた理由はなんでしょうか。

結城 存続の危機は何度もありました。例えば、八代目の時代です。明治維新になって、西洋の文化がどっと流れ込んできました。いきおい伝統文化は古いもの、としてどんどん消えていかざるを得なかったのです。八代目は東京をあきらめて、役者をばら売りにして地方に落着いて行っただけです。その苦難の時代は明治

中期まで続きました。九代目、これは私の祖父に当る人ですが、この九代目が中興の祖、と呼ばれています。何をしたらかと言いますと、それまで旗揚げ以来ずっと続いてきた伝統の上演方法を全く改めたのです。それまでの結城座は文楽と同じように人形を操る遣い手と義太夫を語る人は分業で、人形（人形遣い）は無言で、義太夫節の語るのに合わせて動いていた。九代目はそれを人形遣いが、謡い、

台詞を言うようにしたのです。これは大改革であったのです。この改革がすぐに受け入れられるわけではないだろうし、人形の遣い手たちの訓練も必要です。それで九代目は、十年間東京には戻らずに地方の旅興行に明け暮れ、明治三十年ごろようやく東京に戻ってきたのです。この九代目の編み出した上演方法は今日にも続いているわけです。



存続の危機は何度もありました。

——二百五十年ぶりの根本改革ですね。東京での人気はどうだったのでしょうか。

結城 浜町の守田座でお披露目興行をしたようですが、大変な人気だったようです。人形遣いが声を出すのですから、目新しかったでしょうし、人形は生もので新鮮に映ったのだと思います。九代目の開いたものを僕の親父に当る十代目が受け継いで、さらに発展させていったのです。親父は浄瑠璃の古典物だけではなく、新作にも挑戦して行きました。

明治、大正とライバルの薩摩座が消えた後、細々ながらなんとかやってきたのですが、あの関東大震災ですべてを失ってしまい、小屋もたたまざるを得なくなりました。

——東京は大震災、そして東京大空襲と立て続けに大災難に襲われましたからね。

結城 それで一座は郊外の吉祥寺に移ってきたのですよ。だから僕は吉祥寺の生まれ育ち。井の頭公園一带は僕の遊び場でした。

——結城座の後継ぎになることを運命づけられて生まれてこられたんですね。確か戦時中のお生まれですよ。

結城 昭和十八年生まれです。僕は二

男でしてね。上に兄貴がいる。それで十一代目は兄貴がいったん継ぐのですが、彼はこの世界に向いていないということで、次の僕にお鉢が回ってきた。両親は僕に期待をかけたようで、小学生のころから特訓でした。遊びたい盛りで、友達はみんな遊んでいるのに僕だけ風呂敷包みを持って電車に乗って稽古に通った。これがいやでしたねえ。なんでこんな家に生まれたのかと恨みに思ったこともありました。

——十二代目としてこの芸を守っていくと思われようになったのはいつころからですか。

結城 守っていくとはあまり思ったことはないのです。僕の若者時代は、いわゆる一九六〇年代から七十年代の変革の時代と言うのか、芝居や音楽の世界では今までにない新しい波が起こってきました。芝居でいえば表現主義とか、アンゲラなんてね。僕もそれに影響を受けて、アンゲラ芝居もよく見ましたし、これを糸操り人形で表現できないか、などとまじめに考えたこともありました。

——それが現在の現代劇のレパート

リーにつながっているのでしょうか。

結城 そうだともいえます。あのころは旧態依然というのは批判の言葉でしたが、今になってようやくその大切さがかかるようになってきました。古い文化が大切だ、と気がつき始め、それから派生した新しいものが必要な時だと思えます。

——結城さんはシェークスピア劇も取り上げていらつしやるし、海外公演などもおやりになりましたね。

結城 ついこの間もイタリアのシリ島から連絡があつて、一緒にシリ島公演をしないか、という話が持ち込まれたのです。シリ島にも伝統的な糸操り人形があつて、そこそこの進めようということですが、いまこの話を進めています。早ければ来年中には実現するかもしれません。出し物は「ロミオとジュリエット」になると思います。

——今回、私どもの学芸大公演でも「杜子春」のような新しいものもやってくださるんですね。

結城 「杜子春」は誰でも知っている芥川龍之介の名作ですが、これと結城座にはちよつとした因縁があるのです。芥

川龍之介と言う人は、自分の作品を芝居や映画にすることを決して許さなかったのです。それでもうちの親父（十代目）はあきらめずに、この「杜子春」を人形芝居にさせてほしいと申しこんでいたようです。親父は芥川龍之介にかわいがられていたようですが、芥川さんが生きていた間は実現しなかった。芥川さんがあ

あいう形（昭和二年に自殺）で亡くなった後、菊池寛さんや小島政二郎さんが、許して下さつて、昭和五年に初めて舞台化する事ができたのです。ですからこの演目は結城座にとっては宝物なのです。その芝居を見て、満州映画から映画にしたいという話があつて、役者が演じるのではなくうちの糸操り人形をそのまま映画に撮るといふのです。満映の理事長はあの甘粕正彦で、うちの親父はその映画作りのために満州まで出かけて行きました。しかし、この企画は実現しませんでした。

——それではそういう背景にも思いをいたしながら、拝見することになります。どうも長時間ありがとうございました。

大宅壮一ノンフィクション賞受賞

「逝かない身体」の

川口有美子さんに聞く

些か衝撃的な題名である。「逝かない身体」（医学書院）、サブタイトルに「ALS的日常生活を生きる」とある。「逝かない身体」とは、有体にいえば「死なない」という意味である。命あるものは必ず滅びる。死なない、ということはあり得ない。それをあえて題名にしたところに

「死を待つしかない、という人類にとって極めつけの難病である。」

何か曰くがありそうである。その「曰く」はサブタイトルにある。「ALS的日常生活を生きる」というそれである。「ALS」というのもあまり聞きなれない。Amyotrophic lateral sclerosis という英語の頭文字を連ねて「ALS」と呼び習わしている。「筋委縮性側索硬化症」というのがその日本語訳である。川口さんの言葉を借りれば「人類のもっとも最後に治る病氣」と言われる超難病なのだ。

実は、この超難病に川口さんのお母さんが罹患した。今回の大宅賞受賞作は、川口さんのお母さんの闘病記であり、川口さんを中心にした川口家の介護記録である。言葉でいってしまえば、ごく簡潔になってしまいが、お母さんの発病から見送るまでなんと十二年という時間が経過した。まさに介護が「日常」であったのである。その十二年という月日が川口さん自身を変え、家族を変え、そして世間をも変えて行った。その克明な記録である本書は、現代に生きるすべての人間につきつけられている大問題、いわば生き方を突き詰める「哲学書」といってもいい。

著者・川口有美子さんは東京学芸大学の卒業生である。一九八五年A類国語科卒。その川口さんにインタビューした。

最初の会見の場所は、東京中野区中央、一般に鍋屋横丁（ナベヨコ）と呼ばれている青梅街道沿いの喫茶店だった。ここが川口さんの故郷。この町で一九六二年（昭和三十七年）十二月八日に生まれ、ここで育ち、ここから小金井の学芸大に通った。お母さんを見送ったのは二〇〇七年九月五日。それから丸三年が過ぎている。その時間の経過がそうさせたのか、あるいは十二年間という体験がそうさせたのか、生来のものなのか、予想を裏切るほどの落ち着きと明るさをもった女性が現れた。冒頭に告白してきた。取材のためのインタビューなどという作業はどうでもよくなった。彼女の口からほとばしり出る一言一言が、

ずっしりとした重みを持って胸に沁みこんできたのである。それをどこまで伝えられるか心もとないが、ともかく川口さんとの一問一答をお伝えしよう。

——国語科卒業ということですが、卒業してから後のことを教えてください。就職にはつかなかったのですか。

川口 いいえ、三年間だけでしたが小学校教員をやりました。私が卒業した一九八五年（昭和六十年）という年は東京都の教員採用が全部で四十人という狭き門でして、私も採用試験は合格しているながら、なかなか採用通知が来ない。それで新年度も始まってしまったところ、ようやく「特別学級なら・・・」という話



がきました。それで足立区の小学校の特殊学級に勤めることになったのです。中野と足立では東京の西と東ですから通勤時間は二時間以上、朝六時前に家を出なければなりません。その特殊学級は一年生から六年生まで十人ほどがおりましたが、新米教師の私には障害児のことについて全く知識がない。先輩の二人の先生を手伝うどころか、足手まといだったと思います。それでも二年、三年と経つうちに少しずつ慣れてきて、これから本格的に障害児教育に取り組もうと思っていた矢先、校長先生に呼ばれて、翌年から普通学級の担任をしてほしい、という話でした。以前なら渡りに船だったかもしれないませんが、その時はようやく障害のある子どもたちと向き合う気持ちになつていた時なのに……、なかなか思うようにいきません。さらに思いがけないことが起きました。私は大学の卒業と前後して結婚しまして、家庭を持つていたのですが、その普通学級に移れと言わ

れた時、実は妊娠していることが分かったのです。その上、夫が海外赴任ということになりました。普通学級に移つて一学期だけ勤めたのですが、二学期から産休に入り、その後とうとう学校を辞めるという決断をせざるを得ませんでした。

——特殊学級の教員から海外暮らしですか。赴任先はどこだったのですか。

川口 アメリカです。夫は金融関係の会社に勤めておりまして、ペンシルベニアにあるビジネススクールで学びながら仕事をするという命令でした。それでフィラデルフィアに三年間住みました。

——著書によると、お母さんの発病はロンドンの自宅へ電話で知らされた、とありますが、その後はイギリスで暮らしておられたのですか。

初はなかなか悪い方には考えられなくて、たいしたことない、と楽観的に考えていました。しかし、だんだん事態が呑み込めてきて、急遽、主人を残して帰国することにしたのです。ロンドンから東京まで子供二人を連れての旅でしたが、それから十二年間、母と向き合うことになろうとはまだ想像できないでいました。

——筋萎縮性側索硬化症という病気のことは、その時ご存知でしたか。

川口 そうです。夫の赴任地が今度はロンドンでしたので、二人目の子供も生まれて家族四人でロンドンの郊外に住んでいました。これは大宅賞をいただいた後に知ったことなのですが、私たちが住んでいた家は、第七回大宅賞（一九七六年）を受賞された深田祐介さんが住んでおられた家なんです。「大宅賞を生む家」なんてからかわれましたけど。本にも書きましたけれど、最初は母本人からの電話で「変な病気になってしまった」というものでした。誰でもそうだと思いますが、最

川口 知りませんでした。知れば知るほど恐ろしい病気なのですが、なかなか深刻に考えられませんでした。母も最初は元気でいたから、「変な病気にかかってしまったのねえ」なんて言っていたのです。しばらくしてこの病気は現在では最も難しい病気で治療法も何もないことを知るのでありますが、だいたい罹患して二年ぐらいでみんな亡くなつていくんですね。そのことがなかなか認識できませんでした。母は足腰の筋肉が衰えてきて、自分では歩くことができなくなるのですが、それでもまだあと二年の命などと思つてもいませんでしたからね。周囲のわれわれもそうです。父なんかは母を抱きかかえて歩きながら「きつと治る」なんて言っていましたからね。



お母さんが発病したのが、一九九五年六月、それから十二年余り、妹さんと二人して二十四時間体制で在宅介護を続け、母を見送るまでのまさに「ALS的日常生活」は、その著書に克明に、そして劇的に描かれている。そのいちいちを引用することはここでは差し控える。わずかな引用で事実が伝えられるとは思われない、この主題ではそうした手軽さは厳に慎むべきだと思うからだ。ともかく川口さんの著書「逝かない身体」を読んではいい。ここではすでに著書に書かれているが、さらに川口さんがインタビュ

の間ずっと強調し続けた「人間が生きているとは何か」「死とは何か」について採録しておきたいと思う。

——著書によるとお母さんの病状はあつという間に悪化したように思います。在宅で介護するという覚悟はすぐにできたのですか。

川口 今のところ、この病気には治るといふ見込みが全くありません。原因が分からないから治療法もない。病人はみるみる悪化して行きます。最初の関門は呼吸器を取り付けるかどうかでした。呼吸機能をつかさどる筋肉が衰えてきますから、自力では呼吸できない。それで気管を切開して呼吸器の管を肺の中まで差

し入れて、機械の力で呼吸するようにするのです。その結果、患者は声を失います。それまではかろうじて皮膚や顔の動きで意思疎通ができていたのに、それが全くできなくなるのです。

——それは大きな決断ですよ。著書の中でも呼吸器の問題は、世界中で議論されている、とあります。

川口 母は発病から半年で、皮膚のしわ一本動かせなくなり、瞼も動かなくなりました。それで呼吸器を取り付ける決断をしたのですが。呼吸器で呼吸をし、胃に管を入れて栄養補給をするようになりました。それで九六年の二月には自宅に帰れたのです。実はその状態で母は十一年も生き続けたのです。呼吸器を取り付けるかどうかの議論は、介護をあきらめて死を待つ、ということなのです。呼吸器を取り付ける問題に直面していた時、イギリス時代の友人は「そこまでしなくても」という意見でした。これはもう文化の違いというのでしょうか。欧米では「自己主張ができなくなったら生きていても意味がない」と考えるのですね。でもヨーロッパでもデンマークは違う。呼吸器をつけた患者が飛行機に乗って旅行したりするので。これは二十四時間介護の体制が整っていて、重度の障害者でも政治が面倒をみる体制になってい

るのです。日本はようやく介護保険の制度が始まりましたが、うちの母の場合は、まだ介護保険がなかった。本にも書きましたが、在宅介護を決めた時、介護者の派遣をしている会社に聞いたところ、一か月の費用が四百万円といわれました。そんなお金をかけられる人がいったいどれくらいいるのでしょうか。その会社では「我々は貧乏人は相手にしていない」とはつきり言いましたからね。

でもこれだけははつきりしていると、思うのですが、死にたい人間はいないという事です。それは介護する側も同じだと思ふのです。死んでほしくない、生きていてほしい……。それはいつの世も、どの世も変わらないと思うのです。

——世間では安楽死や尊厳死などの言葉で、「死に急ぐ」というのでしょうか、本人の意思を「尊重」して「死なせてあげる」という考えがありますね。

川口 言葉では尊厳死などと言いますが、それは言葉を換えれば放つて置くということではないですか。人間は生きる方向にしか存在していません。それは障害者になっても変わらないし、認知症でも人の尊厳は変わらないのです。今の時代は人の命に無関心になっていきます。無視しているというのか、人の死に関わりたくないという顔を見ます。こ

れからもっと命の教育と言うのか、死の準備教育をしていく必要があると思いません。

川口さんの「結論」はやはり「教育」と言うところに落ち着いた。

ちなみにALSは十万人に三、四人の発症率という。今、日本だけで八千人の患者がいるという計算になる。川口さんはその八千人のALS患者とその家族のために「日本ALS協会」という組織に属して活動を続けている。その協会は「筋委縮側索硬化症と共に闘い、歩む会」という副題が付けられている。川口さんはその理事であり、東京支部運営委員でもある。十二年間、母親と共にその難病と闘ってきた末に、川口さんは自分の人生のすべてをこの病気と闘うことに集中している。川口さんの次の言葉がずしりと胸に響いた。

「政治も行政も何もしない。何もできないのです。一応福祉国家を標榜してきますので、行政から介護者が派遣されてきたりします。でもその介護者はALS患者をどう扱っているのか、知識も技術もない。そこで何もしないで帰るのです。何もなくてもそれは責任放棄でもなんでもありません。そのうちに患者は確実に死んで行くのです」。

大宅壮一ノンフィクション賞の受賞者と受賞作

- ・第1回(1970年) 尾川正二「極限の中の人間」
石牟礼道子「苦海浄土」(受賞辞退)
- ・第2回(1971年) イザヤ・ペンダサン「日本人とユダヤ人」
鈴木俊子「誰も書かなかったソ連」
- ・第3回(1972年) 柳田邦男「マッハの恐怖」
桐島洋子「淋しいアメリカ人」
- ・第4回(1973年) 鈴木明「“南京大虐殺”のまぼろし」
山崎朋子「サンダカン八番娼館」
- ・第5回(1974年) 後藤社三「わが久保田万太郎」
中津燎子「なんで英語やるの？」
- ・第6回(1975年) 袖井林二郎「マッカーサーの二千年」
吉野せい「涙をたらした神」
- ・第7回(1976年) 深田祐介「新西洋事情」
- ・第8回(1977年) 上前淳一郎「太平洋の生還者」
木村治美「黄昏のロンドンから」
- ・第9回(1978年) 伊佐千尋「逆転」
- ・第10回(1979年) 沢木耕太郎「テロルの決算」
近藤紘一「サイゴンから来た妻と娘」
- ・第11回(1980年) 春名徹「にっぽん音吉漂流記」
ハロラン・芙美子「ワシントンの街から」
- ・第12回(1981年) 受賞者なし
- ・第13回(1982年) 宇佐美承「さよなら日本」
早瀬圭一「長い命のために」
- ・第14回(1983年) 小坂井澄「これはあなたの母沢田美喜と混血児たち」
小堀桂一郎「宰相鈴木貫太郎」
- ・第15回(1984年) 西倉一喜「中国・グラスルーツ」
橋本克彦「線路工手の唄が聞こえた」
- ・第16回(1985年) 吉永みち子「気がつけば騎手の女房」
- ・第17回(1986年) 杉山隆男「メディアの興亡」
- ・第18回(1987年) 猪瀬直樹「ミカドの肖像」
野田正彰「コンピュータ新人類の研究」
- ・第19回(1988年) 吉田司「下戦記」
- ・第20回(1989年) 石川好「ストロベリー・ロード」
中村紘子「チャイコフスキー・コンクール」
- ・第21回(1990年) 辺見じゅん「収容所(ラーゲリ)から来た遺書」
中野不二男「レーザー・メス神の指先」
久田恵「フィリピーナを愛した男たち」
- ・第22回(1991年) 家田荘子「私を抱いてそしてキスして」
井田真木子「プロレス少女伝説」
- ・第23回(1992年) ドウス昌代「日本の陰謀」
- ・第24回(1993年) 塚本哲也「エリザベートハプスブルク家最後の皇女」
- ・第25回(1994年) 小林峻一加藤昭「闇の男野坂参三の百年」
- ・第26回(1995年) 櫻井よしこ「エイズ犯罪血友病患者の悲劇」
後藤正治「リターンマッチ」
- ・第27回(1996年) 佐藤正明「ホンダ神話教祖のなき後で」
吉田敏浩「森の回廊」
- ・第28回(1997年) 佐野真一「旅する巨人宮本常一と渋沢敬三」
野村進「コリアン世界の旅」
- ・第29回(1998年) 阿部寿美代「ゆりかごの死乳幼児突然死症候群SIDS」
- ・第30回(1999年) 小林照幸「朱鷺の遺言」
萩原遼「北朝鮮に消えた友と私の物語」
- ・第31回(2000年) 高山文彦「火花北条民雄の生涯」
- ・第32回(2001年) 平松剛「光の教会安藤忠雄の現場」
星野博美「転がる香港に苔は生えない」
- ・第33回(2002年) 米原万里「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」
- ・第34回(2003年) 近藤史人「藤田嗣治「異邦人」の生涯」
- ・第35回(2004年) 渡辺一史「こんな夜更けにバナナかよ」
- ・第36回(2005年) 稲泉連「ぼくもいくさに征くだけけれど竹内浩三の詩と死」
高木徹「大仏破壊/バーミヤン遺跡はなぜ破壊されたのか」
- ・第37回(2006年) 奥野修司「ナツコ沖縄貿易の女王」
梯久美子「散るぞ悲しき硫黄島総指揮官・栗林忠道」
- ・第38回(2007年) 佐藤優「自壊する帝国」
田草川弘「黒澤明vs.ハリウッド『トラ・トラ・トラ』その謎すべて」
- ・第39回(2008年) 城戸久枝「あの戦争から遠く離れて私につながる歴史をたどる旅」
山田和「知られざる魯山人」
- ・第40回(2009年) 平敷安常「キャバレーになれなかったカメラマンたちベトナム戦争の語り部たち」
- ・第41回(2010年) 上原義広「日本の路地を旅する」
川口有美子「逝かない身体—ALS的日常生活を生きる」

個人の教育ではない。これは社会教育の問題でもある。今度の大宅賞の受賞が、そんなALSの社会教育の一つの機会となればいいのだが……。

インタビュを終えた後、写真を撮りたいというと、それでは「例の場所にカバー写真になった場所である。カットに使った著書のカバー写真はご覧のように何の変哲もない東京の路地の空いっば

いに広がる夕焼け空である。でもこの街並みと夕焼け空、そして撮影日時は川口さんにとって、特別の意味がある。中野区中央三丁目、二〇〇七年九月十二日、お母さんの告別式の日の夕方、お母さんが川口さんを生んで育て、そして難病との闘いを終えて旅立って行った街の上に広がった夕焼けなのである。川口さんはこの夕焼け空にお母さんが溶け込んでいく、という思いから夢中でシャッターを押しただけという。「その路地で写真を

撮りましょう」と当方からお願ひして、撮ったのが、別掲の写真である。撮影を終えた後、すぐ傍の川口さんの実家に連れて行ってもらった。お母さんの病室は、今、川口さんの活動のための事務所になっている。その傍らに仏壇があり、お母さんが祭られている。

〔註〕ALS＝筋萎縮側索硬化症の有名な

- ・ルー・ゲーリック
- ・キヤット・フィッツシュ・ハンター
- ・チャールズ・ミンガス
- ・マイク・ボーカー
- ・ステイヴン・ホーキング(異論もある)
- ・マクスウェル・テイラー
- ・ハンス・フォンク
- ・モリー・シュワルツ
- ・デヴィッド・ニーヴン
- ・荻原英幸
- ・川島雄三
- ・毛沢東
- ・徳田虎雄
- ・石川緑
- ・遠藤嘉信
- ・篠沢秀夫

北海道環境授業報告Ⅱ小森伸

(東京学芸大学健康・スポーツ科学講座准教授)

「地球は子孫から借りているもの」
何千年もの間、自然を畏敬し自然と調和・共生した生活文化を築いてきたアメリカ・インディアンの格言です。水・空気・食物・資源など、地球からもたらされる自然の恵みを現代に生きる人達だけが使い尽くすことなく、可能な限り自然を今の状態で、さらに今よりも美しく豊かな状態で次世代に返さなければならぬという教えです。

このメッセージが、富良野自然塾の実習フィールドにある石碑に刻まれています。東京学芸大学は、昨年の平成二十一年度からその自然塾さんとの連携



で二泊三日の集中授業(実習)を行っています。富良野自然塾は、あの「北の国から」の脚本家で有名な倉本聡さんを塾長とするNPO団体です。自然の中で五感を使いながら環境について考える体験型環境教育プログラムを二〇〇六年から提供しています。倉本先生いわく、自然塾で現職の先生たちを対象に講義をした時、生徒よりも先生たちの方が環境に対してあまりに関心かつ無知であることに愕然としたそうです。それで、これから先生になる若者たちに少しでも思いを伝えたいと考えられ、教員養成系である学芸大学と連携して取り組むに至ったという経緯があります。二回目となる今回は九月四日(土)～九日(木)の日程でした。初日は北海道の広く気持ちの良い晴れ空が三十四人の学生を迎えてくれました(一年生三十二人/二年生一人/四年生一人)。最終日に記す履修学生の心の記録(「ふりかえり」としての手記)を取り上げながら、活動の一端を紹介していきます。

「参加した理由は、倉本聡さんに会いたがためでした」

このように、著名な倉本先生の話





植樹プログラム

聞きたいという動機で当授業に参加した学生も少なくないと思います。富良野での実習は、その倉本先生の講話から始まりました。色々なお話をして下さったのですが、その中でも印象に残った内容をご紹介しますと思います。

「鼻をつまみ息を止めてみよう！（倉本先生）」

実際にやってみるとほとんどの人は一分も呼吸をとめておくことはできません。当然ながら私たちは空気（酸素）がなければ生きていけません。その酸素またそれを作る樹木、その樹木によって守り育まれる「水」。その水は限りある資源であるにも関わらず、乱用され汚染

が進んでいること。この様に、当たり前であって、だからつい忘れがちになつてしまふけど、我々が生きていく上で無くてはならない大切なものへの気づき。倉本先生は、それらの存在や私たちとの「つながり」の大切さについて、身近なものをイメージさせることで分かりやすくお話下さいました。例えば石油の話では、「石油は残りあと四十年と言われているが、これを富士山の容量に換算するとどのくらい（何合目位）になるか？」という問いかけがありました。富良野自然塾のスタッフの方々に試算したそうですが、富士山全体の七分の一度、言い換えれば約三〜四合目ぐらいにしかならないそうです。「思ったよりずっと少ない！」と感じた人も多いのでは？

「富良野で行われた環境教育プログラム。行く前はどのようなものか想像できず、不安な面もありました。しかし、初めのほうに行つた五感プログラムで、裸足になつて直に自然を感じるという経験をしたことで、環境教育ってむずかしそうだなという先入観は消え、自ら『感じる』ことが大切なのだと思ふようになりました」

講話の後は、実際にフィールドに出て「裸足の道」というプログラム。これは、二人一組になつて手をつなぎ、一人が目

隠しをし、もう一人はガイド役になつて二〇〇〜三〇〇メートルのトレイル（小道）をヘアで歩きます。歩いている時は、ガイド役も含めてしゃべってはいけないうルールです。トレイルは、草や土の部分に加え、意図的にウッドチップや小石を敷設している箇所などもあつて変化に富んでいます。一周したら役割を交代してもう一周します。

このプログラムの目的は、我々の直接の感覚（五感）を通して知ること、すなわち直接体験による学びの大切さに気づくことにあります。それは何故でしょうか？ある医師によるこんな実話があります。小学生が台所に置き忘れて腐つたリンゴをそのまま食べて吐いてしまい、その母親が「味覚異常」ではないかと心配になり医者相談したそうです。当然、味覚障害ではなく、単に腐つたリンゴや腐つた食材などを見たこともなければ（例えば、映像やなかで見たり誰かから聞いた）ことがあつたとしても、直接触つたことやその臭いを感じたこともない経験の希薄から起こつた異常行動だつたという話でした。この様に、あることについての体験不足によって、賞味期限や異臭などに気付けないといったような危険回避能力が欠如している人達が実に多くなつていようです。

言うまでもなく、危険を避ける判断力は、私たちが安全かつ健康に生きていく上で欠かせません。また、対人関係や自然との関わりについても同じことが言えるでしょう。この様なことから考えると、自らが本物に触れて、私たちが有する感覚を総動員して感じて知り、理解することの大切さが伺えます。五感を通じた直接体験によって獲得される直接的で具体的な知識を基礎とすることは生きていく上で大切（基本）！であるというメッセージが、「裸足の道」のプログラムにありました。

その後、引き続きフィールドで「地球の道」プログラムを体験した後に宿舍に移動し、そこで「環境問題概論」の講義を受けて初日は終了です。

さて二日目。前日の晴天とは一転して今にも雨が降りそうな空模様。本日のメイン活動は午後の「農耕研修」と「植樹」です（午前中は宿舍裏手の東大演習林の一部である里山に入り、自然観察をしながら二時間ほど歩きました）。

「考えた。畑仕事がだんだん辛くなつてきた祖父母を残して、農業を継ぐことなどみじんも考えず東京に出てきた。そして今環境教育プログラムを受講して耕作放棄地の耕作体験をする私。何のために東京にいるのか、どんな仕事につくの

だろうか。家族の手前適當なことはできないなと思った」

「農耕研修」は、耕作放棄地となって荒れている土地を再度開墾し農地にするという作業でした。元耕作地といつても、一見すると「ここが本当に元々畑だったの？」と思うくらい雑草は覆い繁り、小石が散在していて土などは全然見えない状態です。そのような荒地地を、雑草と石を取り除き、土を耕し有機肥料をまいて作物を植えられる状態の土壌にする過程までを行いました。ただ単に開墾しただけでなく、農地における土の意味（作物を育てるための土壌に必要な要素、等）や、耕作地周囲の生き物や植物とのつながりなどの話を交えての作業となりました。

自然塾さんによると、日本の耕作放棄地のすべてを合わせると埼玉県面積くらいになるそうです。その理由はいくつかありますが、特に農業従事者の高齢化によって農業が続けられなくなったというのが大きな理由とのこと。現在、日本の全農家は約三〇〇万人で、その四七%が七〇歳以上だそうです。当然私たちは食べなければ生きていけません。したがって、食物を作る農業は私たちが生きる上で欠かせないものです。しかし、日本の食料自給率は四〇%とされ



農耕体験プログラム

(二〇〇三年度農林水産省の試算)、全体の半分以上を海外からの輸入に頼っています。これでは、何か有事の際に輸入がストップした時には日本人が食べられないことは単純な論理として分かりきっていることです。このような日本の「食」という問題に対して、その食を生み出す農業を考え直す取り組みの一つとして、自然塾さんでは使用しなくなった元耕作地を再び作物のできる農地へ戻すという活動もされています。

次に少し場所を移動して「植樹」活動となりました。

「葉をつけない木を見ると病気にかかっているのかなと思ってしまうます。森や木の緑を見ると、コレが全部なくなったらどうなるんだろうと感じます。今まで自分になかった見方を身につ

けた。そして新しい見方で物事を考え行動することで人間として成長できるのだと知りました」

自然塾さんのフィールドは、富良野プリンスホテル裏手にある元ゴルフ場のコースの一部にあります。ゴルフ場の閉鎖後、そこを昔の森に戻すという目標を掲げ、プログラムの一環として植樹活動を行っています。自然塾さんでは、山にもともと自生している木々の種から自分たちで苗を育て、それを植樹していくという方法をとっています。学生達は、そのような話も伺いつつ三〜四人一グループに分かれて植樹を行ったのです。天気予報によれば、二日目の午後は少しまとまった雨が降るとのことでしたが、結局活動中にはほとんど降られることなく、この日もすべてのプログラムを経験することができました。

「富良野での環境学習は、倉本さんのお話を聞いたり、はだしの道を歩いたり楽しいこともあったけれど、四分間と楽しいこともあったけれど、四分間スピーチとハードなスケジュールが、本当につらかった。人前で話すことは嫌いなじゃないけれど、四分間は長いと感じるし、お題も、中身を考えるのが大変で、本当に帰りたいたいと思ってしまった。けれど、逃げ場がない！と思いやってみると、最終的には、自分なりに練り上げた

ものが発表できた。普段、楽な方に逃げてしまいがちだけど、今回はきちんと向き合って、課題と戦えたと思う」

最終日三日目の最後の活動（午前中）は、各自のまとめとしての課題発表でした。内容は、フィールド内にある自然のものを選び、それに成りきって他にに向けて環境教育的に一人で表現するというものです。一人に与えられた時間は四分。指導者として、伝えたい（伝えるべき）と思うことを如何に相手の心に響かせて届けることが出来るかというテーマがこの課題にはありました。別な見方をすれば、四分間のシナリオを自らが作成しそれを演じて伝えるという「一人芝居をしてみよう」ということです。脚本家・倉本先生率いる自然塾さんらしい発想だなと思うとともに、実際のところ教員も同じであることに気付かされました。インストラクターいわく、「先生も毎授業ごとに、教室という舞台において、授業内容のシナリオを描き、それに基づいて生徒達がより興味深く理解できるように工夫して表現し伝えているのだから」。発表ごとにインストラクターから「こうすればもっと良くなる」というとても実際のなフィードバックをいただきました。課題自体は決してやさしいものではないなかつたと思います。ほとんどの学生

が内容作りから本番の発表において苦心していました。しかし、将来教員を目指す彼女たちにとって、どう表現して伝えるかという視点、考え方、方法などに考え向き合うとても良い機会やきっかけとなったようです。

「一日目、二日目はただただ楽しくて、自然塾ではガムシヤラに話を聞いて、自分というものよりは環境について深く考えてみた。三、四、五日目は楽しさの中に、相手の事を深く考え、その結果自分について深く考えさせられた」

このコメントからも覗えるように、実は当授業は富良野だけで終わりません。富良野実習の後、午後に日高（国立日高青少年自然の家）に移動して、三泊四日でもう一つの実習を私の担当で行うという二部構成になっています。自然塾では、様々な環境問題について単に断片的な知識としてではなく、その原因やつながりの理解を踏まえて体感的により深く学ばせていただきました。日高実習では、それまで富良野で学んだ自然との調和の考えを心に留めつつ、人（仲間）とのつながりと調和、そして自分自身を見つめることをテーマに行いました。持続可能な社会、地球、未来を考えた時、言うまでもなく自然環境に最大限の配慮をすることは基本となるでしょう。しかし

一方で、その自然が守られても人間同士の不和があれば持続できる世界をこの地球に築けないと考えるからです。

「富良野で環境や自然についてとか、表現の仕方を勉強して、日高にきて自然を仲間たちと共有するというプログラムは、すばらしいコンビネーションだと思います。もし日高にこなかったら、富良野で得たものはただの知識でおわってしまう、私の心には多分とどきませんでした。でも日高に来て、この自然をずっとあとまで残したい、絶対なくしたくないと心から思いました。それはきつと一人でできていたら思わなかったことだし、部屋にこもっていても分らないことでした。ここで出会った大切な仲間と大自然、それらにつくられたすばらしい思い出を忘れずと大好きでいようと、この新鮮な気持ちを忘れずこのままでいようと思えました」

日高では4グループに分かれ、自然と仲間を近くに感じつつ自分と向き合うことができるような活動を行いました（自然の家の職員、大学からのスタッフの方々に指導サポートをしていただいています）。その詳細をここで紹介することはできませんが、大まかには、グループ活動（話し合い、協力、遊ぶ、等）を通じて共に楽しみながら様々なことに取り

組んだり、自然の中で自身の好きなことをしたり（クラフト、楽器、釣り、川遊び、トレッキング、散歩、等）、一人でゆったり時間を過ごしたり、などといったものでした。

「自然環境の学習や体験をしていく過程の中で、人間にとって自然がどれほど大切な感じると共に、人間にとって必要不可欠なものが『人』であることを更に強く感じました。富良野での裸足の道にはパートナーが、発表には見てくれる人がいなければ成り立ちません。日高においても『人』の重要性がより感じられ、グループ活動は全員がいてくれたことで全員が楽しめたのだと思っています。みんなに感謝。そしてこの思い出の舞台となった北海道の自然に感謝です」

当授業は、富良野・日高で様々な体験をすることによって「自然」・「他者」への理解と調和、さらにそれらへの気づきの中で「自分自身」と向き合うことを通じて、今後の人生に生かすことのできるヒントやきっかけとなる「探求と成長の旅」になってもらえればという願いがあります。富良野自然塾および日高自然の家のスタッフの皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。そして、一緒に旅をした参加学生と学芸大スタッフのみんな、また

いつも優しく見守ってくれた富良野・日高の北海道の大自然にも感謝しつつ、最後に学生の手記で締めくくりたいと思います。

『なぜ自然を守る必要があるのか?』その答えは『未来の子どもたちに残してあげたいから』です。『人類という種族のため』とか、そんな大それた事じゃなくて、今ある環境は自分たちのものではなく借り物にすぎない。借りたものは返す。10も戻ったら10返すんじゃないかと、自分の『ありがとう』の気持ちをこめて、10+1で11にして返す。そんな風に思えるようになりました。ありがとうございます!』



裸足の道プログラム

教育実習を附属世田谷小で定点観測 実習生は何を見、何をし、 どう変わったか

九月六日（月）から十月十五日（金）までの六週間は、教育実習期間だった。三週間ずつ前期、後期に分かれて、教育系の三、四年生は全員実習を行った。そのうち、小金井、世田谷、大泉、竹早の四つの附属小学校で初めての实習をした三年生に密着して、彼らは何を見、何を感じ、何を学んだかを追ってみた。

四附属小のうち、お世話になったのは世田谷小学校（大井田義彰校長）である。世田谷小は各学年三クラスずつ、合計十八クラスに三人から四人の実習生が振り分けられた（後期は六年生の振り分けはなし）。前期六十九人、後期四十九人の学部三年生は三週間、みっちり子供たちと交流し、生まれて初めての授業を体験した。

このうち前期、後期とも同小学校の教育実習担当・内田良三教諭の担任クラスである四年三組で定点観測をさせていただいた。

壇上に勢揃いした実習生 着任式で全校児童に挨拶



九月六日朝八時、実習生は世田谷小学校児童館（講堂）に勢揃いした。黒いスーツに身を固めた六十九人が壇上に並び、整然と並んだ全校児童は、團伊玖磨（同校卒業生）作曲、門田ゆたか作詞の校歌で迎えた。「あしたは花とさきほこるみんなきょうだいさくららのきしよう……」。元氣いっぱいいうたう子供たちの歌声に実習生も「三週間皆さんと元気に遊び勉強します」と誓いの言葉を述べた。三十分ほどの歓迎式は、すべて子供

たちの手で進行された。後で聞いたところでは四年生以上の代表委員が、プログラムなどすべての段取りを決めているのだという。

四年三組に配属された綿江宗久（体育科）、西村塁太（理科）、青山千晃（社会科）、新井美聖（国語科）の四君を待っていたのは、三十八人の子供たち。ここでも歓迎会が用意されていた。ここも会の進行などはすべてクラスの子供たちの手で進められる。司会に促されて四人が自己紹介をする。それに続いて今度はクラスの全員が一言ずつ自己紹介を兼ねた歓迎の言葉を言う。「好きな教科は体育です」「私の好きな食べ物はハンバーグです」……。和やかな歓迎の言葉が続く。

続いて内田教諭の算数の授業が始まる。余りの出る割り算の学習だ。内田教諭は経験二十四年のベテラン。それまで華やいでいた教室の雰囲気を一瞬のうちに引き締める。その手際のみごとさ。教室の後ろに並んだ四人の実習生は熱心にメモを取りながら、先生と子供たちのやり取りを固唾を呑んで見守っていた。

実習生たちは、このように見て学ぶ実習が四日間続いた。その間、休み時間には子供たちと遊び、給食も一緒に食べる。実習生よりも子供たちの方が先に慣れ、打ち解けてきた。

初授業は算数 バンダナを使って広さを測る課題



「積極的に近づいてくる子供だけにとらわれないで、少し離れてじっと見ている子供に目配りを。その子は自分も行きたいけれど、行けないのだから」という内田先生の言葉が身にしみる。ともあれ実習生は数日でクラス全員の名前を覚え、一人ひとりの個性も把握するようになった。

実習五日目の九月十日（金）、いよいよ実習生の初授業の日である。トッパバッテリーは新井美聖さん。教科は自分の専攻である国語だ。教材は児童文学者・今西佑行の「一つの花」。出征する父親を送り出すゆみ子の物語である。ゆみ子はようやく言葉を話し始めたばかりの幼児。父親が戦争に行く意味も、戦時下の生活もまだ理解できない。いわゆる「戦争教材」である。重要な教材ではあるが、二十歳そこそこの新井さんにはなかなか難しいテーマである。

新井さんは「初めて授業をします。昨夜は緊張であまり眠れませんでした」と冒頭に心情を打ち明けた。しかし、その割には声も落ち着いている。まず、その物語全体を自分で音読して聞かせた。その後で、「軍隊」とか「配給」とか、現在の生活ではなじみのない言葉を選び出し、その意味を調べる課題に進んだ。子供たちに言葉を選ばせるなど、子供たちとの「交流」にも気を使いながら、授業を進めた。ただ半ばを過ぎたあたりで「ワークシート」という用紙を配って、子供たちに感想を求めるような課題を与えたのだが、これが後の反省会で話題になった。いずれにせよ新井さんは、何とか初授業を終えた。

給食を終えた後の五時間目、西村君



児童たちは、毎年のことながら温かく実習生を迎えてくれた

の算数の授業である。分度器を使って角度を測る課題である。それも様々な角度ではなく、直角（垂直）に気付かせるという内容だ。西村君はさんさん考えた末、学校近くの道路地図を配った。そのうえで角度の違う四つのパターンを示し、地図の中からこのパターンに合う交差点を探すと作業を与えた。

子供たちは隣と相談したりして、その地図をぐるぐる回しながら、その交差点探しに熱中した。地図が少し詳しく過ぎたのか、子供たちにとっては知り尽くした学校近くの地図のせいも、課題とした与えた交差点が、無数に出てきた。その交差点の角度を分度器で測る作業をさせたが、西村君の思い通りにはなかなかいかない。しか

も三差路や五差路など複雑な交差点ではなく、直角に交わる十字路に話を持って行きたいのだ。子供たちは自分たちで測った交差点の角度をそれぞれに発表した後、パターンの中の一つ、つまり直角交差点を取り上げて、「この角度を何というか」と質問した。すると教師の意図を察知したのか「垂直」と答える子供がいる。西村君、思わず笑顔がこぼれて「そう垂直と言います」といい、垂直の説明を始めた。少し強引という印象はあるが、ともあれ、課題の「垂直の理解」というところに授業は帰着した。

ここまででこの日の授業は終わり。しかも「一斉下校の日」ということで子供たちは放課後遊んだりせずに、一斉に下校して行く。

子供たち全員が下校した後の教室では、初授業の反省会が始まった。四人の実習生が向かい合って座り、まず授業者が、自分の感想と反省を述べ、続いて参観していた他の実習生が感想を述べるというやり方である。クラス代表という役割を分担した綿江君が司会役をした。

先頭打者を務めた新井さん。「ものすごく緊張したけど、なんとか落ち着いてできた。ただ、子供から予想をしない質問が出たりして戸惑ったところもあった」、「質問に対処しきれなかつ

た感じがする」、「戦争そのものに焦点を合わせ過ぎて、内容に子供の興味を引き付けることができなかつたのでは」といった感想を述べた。これに対して参観の三人からは「音読がよかった」、「国語の授業なのか社会科の授業なのか、わからない感じがした」といった感想がでた。四人の話し合いを黙って聞いていた内田教諭が口を開いた。

「授業者と子供の関心事にズレがあるのは当たり前のことだ。ただ、先生の意図のとおりに行っているのはいいかどうか、よく考える必要がある。『一つの花』のような戦争教材では、子供が戦争を知らないと思っただけいけない。子供たちは『戦争は悪』という正義感ばかりと持っている。子供にとってインパクトの強い教材である。だから無理に教師の意図の方に引きずり込まないで、子供たちの受け止め方を大事にしてあげたい。途中でワークシートを出したけれども、あのタイミングは良かったのかどうか。そこで子供の思考や感性の動きを中絶させてしまっていないか。また、教科書の文字の部分だけに気持ちが行っていったようだが、実はこの單元には三枚の挿絵が入っている。この絵も教材なのだから、うまく活用していく必要がある」。なるほど、なるほどと全員が大きく



うなずいた。戦争教材というのは、時がたてばどんどん難しくなる。実習生が戦の知識がないのは当たり前。内田教諭の世代でももうほとんど知らない。体験がなければ語れないというのではなく、子供たちと共有できる部分はどこかをしっかりと見極めていかなければならぬ、という内田教諭の言葉は暗示的である。

続いて西村君の算数の授業についての検討に入った。
授業をした本人は「子供を混乱させ

てしまったみたいだ。もっと余裕を持っていなくてはならないのに、すべてがいつぱいいつぱいだ」と素直な感想を述べた。参観した側からも「地図を用意したのはよかったが、その活用方法が十分でなかったのではないか、授業者は直角の方に意識が行きすぎて、角度調べなのにせっかくだら度器を使って測りながら、先生が『だいたいいい』などといってしまつて子供は混乱してしまつた」などと手厳しい意見も出された。

内田教諭は「前日、苦勞して地図のカラーコピーを作るなど良く努力したと思う。ただ、その地図が授業で十分に生かせなかったね。子供は何かしたら丸を欲しがるものなのだ。自分のやったことがあつていたら丸をつけてほしい。それがちよつと急ぎ過ぎて子供の作業を評価してあげられなかったね。またこれはすべての授業に当てはまることなのだが、教師は良く『気付かせる』という言葉を使う。でもこれは僕は違うと思う。気付かせるという時には、善悪の判断がすでにある。そうではなくて子供にとって『気になること』を整理させる、ということの方が大事なのではないかと思う。教師が無理に引っ張つていこうとしてはだめなのだ」と述べた。

そういえば内田教諭の授業は子供の

音楽科の学生は、音楽室で緊張の初授業



敬老の日の連休が明けた二十一日（火）、この日は各専攻教科ごとに分かれたの研究授業の日である。社会科学の研究授業は青山千晃さんが、四年三組で行うことになつたので、それを参観した。

片言隻句、小さなつぶやきも見逃さない。つまり子供の「気になること」を拾い上げることには徹しているように感じられる。実習生たちはそれをどこまで学ぶことができたろうか。
初授業の検討会は夜の八時過ぎまでみっちり行われた。実習生たちのまなざしも真剣そのものだった。

授業のテーマは「交通安全」。この授業の前の時間を使つて、すでにフィールドワークをしている。学校の傍の交差点に行つて、交通安全についてどんな配慮がされているかを子供たちに観察させているのだ。この日の授業では、まずその気付いたものを発表させるということから始まつた。それぞれが発表するのではなく、すでに青山さんが聞き取りを済ませていて、それを一覽表にしたものを配布した。そこから自分の気付いたものと同じものを確認させるといふのが最初の作業だった。

「自転車専用部分があった」、「車の停止線の位置が変わっていた。横断歩道の距離が少し変わった」、「ガードレールが新しくなっていた。それはコンビニができたのでそこへ出入りする車のためにガードレールを外したのだろう」など気付いた点を次々に発表していった。そのように変わったことでどんなことが起こったか、という質問には「ななめ横断する人がいる」「不便になったからななめ横断も仕方がない」などの意見も出た。しかしそれほど活発な感じは受けなかった。子供たちが考え込む場面が少なくなかった。

この前期実習で社会科専攻は九人。その全員はもちろんのこと、社会科担当教師など十数人が青山さんの授業を見守った。実習生たちは事前の打ち合わせの通り、それぞれ役割分担を決めて、記録を取るもの、子供の動きや発言をチェックするものなど漫然と見ているだけのものはいない。

夕方五時過ぎから、社会科部会の検討会が始まった。

「子供の手があまり上がらなかったのはなぜだろう」

「事前にフィールドワークの結果をまとめて、印刷し、それを配布したのはよかったかどうか。質問すると『そこに書

いてあります』と答えた子供がいたが、子供にしてみれば、同じことを何度も聞かないで、という反応になってしまったのでは……」の意見が出された。九人の社会科専攻の実習生たちは実に丁寧な反省会を続けた。二時間ほどして意見が出尽くしたところで担当教諭が発言した。

「みんなの真剣な検討には感心した。ただ子供たちが盛り上がりなかったというのは、大事な点で、なぜ盛り上がりなかったか、教師は真剣に反省しなくてはならない。が、これは永遠のテーマ、大変に難しいことだ。技術ではない。子供たちはどう考え、どう感じたかを大事にしてほしい」。これまた、なるほどと納得するまどめだった。

実習は最後の週、残りもあとわずかである。大井田校長に附属小学校での教育実習の意義などを聞いてみた。

「私は今年四月から校長に赴任した。それまでは大学にいて実習生を送り出す側だったけれど、初めて受け入れる側に立って、付属はどれだけ大変なのか痛感した。先生方が実に熱心に取り組んでいる。これは大学もその他の関係者ももっと認識していいと思う。実習生たちは、生まれて初めて子供の前に立って授業をしたわけだが、実に真剣だった。頼もしいとさえ思った。ここから成長して行っ

てくれることを大いに期待している」。

九月二十四日（金）、三週間の実習が終わる日である。午前八時すぎから、着任式と同じように、児童館に全校児童が集まり、実習生は壇上に並んで離任式が行われた。各学年にマイクが回って、子供たちの感想が聞かれた。「先生にたくさん遊んでもらった。」「○○先生の授業が面白かった」「本当の先生になって戻ってきてください」といった言葉が寄せられた。実習生代表も「あつという間の三週間でした。この経験は一生忘れません」と御礼の言葉を述べた。

教室に戻った四年三組の四人の実習生に感想を聞いた。

「クラスのお別れ会では、前の日から私は絶対泣いてしまうと思っていましたが、やっぱり泣いてしまった。本当に楽しく、感動の三週間だった。私は教師になるために学芸大に入ったので、もう一年しっかり勉強してきつといい教師になります」（新井美聖さん）。

「結局五回授業をしたけれど、やるたびにうまうまかかった。自分の考えが甘かった。それでも子供たちはついてきてくれた。実習に来るまであまり真剣に教師という職業について考えていなかったけれど、これからまじめに考えます」



実習生の指示を真剣に聞く4年3組の児童たち

（青山千晃さん）。

「実習に来るまで、実はあまり子供が好きではなかった。でもこの三週間ではんとうにかわいいと思うようになった。授業では僕の授業中にそれまで跳び箱が跳べなかった子が、跳べた時のこと忘れられない。これは一生忘れられない思い出です」（綿江宗久君）。

「授業は落ち着いて、と言いつつも聞かせたはずなのにいつの間にか夢中になっている自分に気付いた。実習に来る前と今では自分自身が変わったと思う。子供から図工の授業で作った作品をプレゼントされた時には本当に嬉しかった」（西村壘太君）。

このようにそれぞれに成長して実習を終えた。四人は子供の帰った後、黒板一杯に「お礼の言葉」を書き連ねていた。



社会科のフィールドワーク これは担任教師の授業だが
子供たちへの指示を熱心に聞く実習生

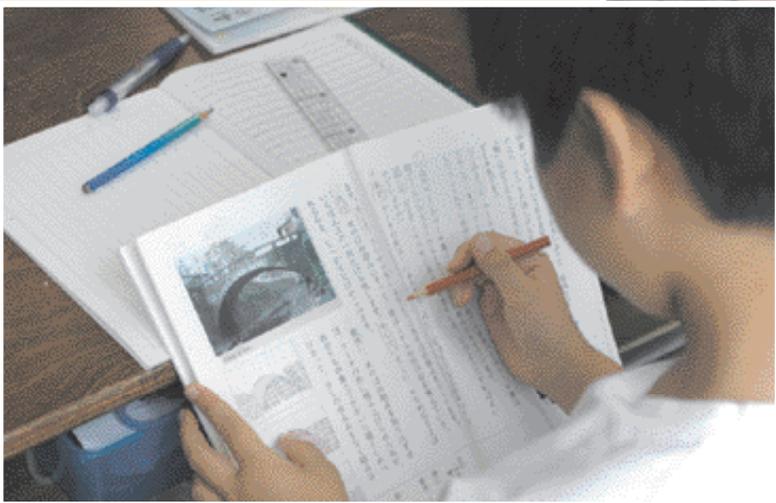


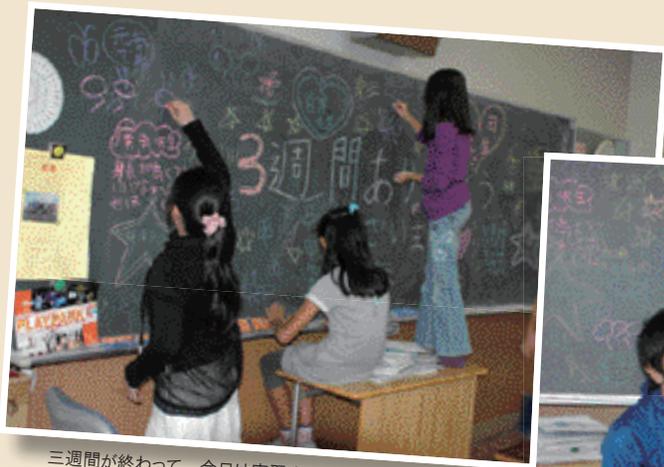
音楽では音楽劇をやることになって、真剣にダンスの練習をする子供たち



図工では実習生へのプレゼントの作品を作る

赤鉛筆で実習生の指示を教科書に書きこむ（国語の授業）





三週間が終わって、今日は実習生さんのお別れ会。
当番の子供たちが黒板に実習生さんへのメッセージを書き連ねる



子供たちのメッセージを読んで思わず涙ぐむ実習生さんたち



子供たちからは実習生さんたちに心づくしの贈り物。
また、感激の涙、涙

離任式 お世話になった先生方に実習生代表がお礼の言葉



世田谷小の子供たちを見守る藤棚 135年の伝統を誇る学校である

対談

「特別支援教育」に求められるもの 白木 信子氏 × 澤 隆史氏

東京学芸大には「特別支援科学講座」という専攻がある。現在そこで学んでいる学生は一学年四十人ほど。この学生たちは将来、いわゆる障害児教育に携わることを目指している。障害児教育という呼称は今の目的ではない。「特別支援教育」という。辟雍会幹事（広報担当）の澤先生はその講座の教官である。講座の目的とするところは、特別な支援を必要とする子供たちを教える教員を育てること——この目的は果たされているかどうか。一方、白木先生が今年から辟雍会副会長に就任されたことはホームページの新役員紹介にも登場してもらったが、板橋区の小学校で十二年間校長を務めた末、現在は板橋区教育委員会指導室の学校相談員という立場で仕事をされている。

特別支援教育の教員を養成する側、送り出す側とその教員を受け入れて、実際の特別な支援を必要とする子供たちを指導する側……表と裏ではない、本来一本の糸でつながっているはずの両先生に特別支援教育の現状と問題点を語り合ってもらった。



——「特別支援」というのは言葉としてちょっとわかりにくいのですが、具体的にはどういうことなのですか。

澤 たしかに用語がごちゃごちゃしています。東京学芸大にいわゆる障害児教育の課程ができた最初（一九六〇）昭和三十五年、「特殊教育教員養成課程Ⅱ聾教育専攻、養護学校教育専攻」を設置）は特殊教育という言い方をし、それが後に障害児教育学科となり、そして現在の「特別支援教育」という呼称になったのです。

——名前が変わったということは中身が変わったのですか。

澤 障害の概念が変わったというのか、扱う分野が広がったということができると思います。現在、学芸大の「特別支

援教育教員養成課程」は四つの分野に分かれています。聴覚障害、これが私の担当している分野ですが、他に言語障害、発達障害、学習障害です。

——発達障害と学習障害と言っのほど違うのでしょうか。

澤 学習障害という言葉は私が入学した三十年ほど前はありませんでした。発達障害という言葉の中にはADHD（注意欠陥多動障害）、LD（学習障害）、高機能自閉症（知的障害を伴わない）があり、現在ではこの三つを合わせて「発達障害」と呼んでいます。学習障害というのは知的に遅れているわけではないが勉強が苦手。読み書きが苦手といった障害のことを言います。

白木 私たちのころにはなかった分野ですね。学業不振児というような言い方をして、障害とはいっていませんでしたね。

澤 特殊教育というのは英語の Special Education の翻訳語で、さらに Special needs Education となり、欧米ではいわゆる天才児教育や貧困家庭の教育問題なども含まれます。日本ではそこまではいっていません。

白木 現場にいと、入ってくる先生が、どういう資格を持って、どういう勉強をして現場に出てきたのかわか

りづらいですね。

澤 特別支援教育の教員免許状は現在五領域あるんです。視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、知的障害、そして病弱です。学習障害などは入っていないのです。またこうした障害領域による免許制度は、四年前に始まったばかりで、この免許状に対応したカリキュラムで教育を受けたのは、現在の四年生が初めてです。

臼木 今、現場は情緒障害傾向の子が増えてきて、そうした専門教育を受けた教師の需要が非常に増えています。専門の先生がいなくて困っているのです。特別支援教育の免許を持っている人を採ろうと思ってもなかなかいません。ようやく人材を確保したと思ったら、その人は必ずしも特別支援教育の専門家ではない。「これから勉強します」などという人も多く、「先生どう対応したらいいですか」などと聞いてくることもあります。

——**情緒障害とはどういう障害なのか**。またそういう障害の子供が増えてきたというお話ですが、なぜ多くなったのでしょうか。

臼木 情緒障害と言うのは知的発達障害とは異なる概念で、集団での行動が苦手な子などですね。普通学級に入っただけで、対応がうまくいかないと、そういう要素のある数人の子が、同じような行動をと

るようになり、クラスが安定しない。それで学級経営ができないような事態になります。小学校一年に入学して、ある程度時間が経つと落ち着いてくる場合もあるのですが、落ち着かないまま、医師など専門家に診てもらおうと、「〇〇の傾向がある」などと診断がつくことが多い。ところが親がなかなかその事態を理解しない場合もあります。「自分だって子供の時はそうだった。高学年になればだんだんできるようになるよ」などと言って、障害だと認めようとしないのです。でも実際は教室で友達を突き飛ばす、物を壊すような乱暴なことをする。すると今度は被害にあった子供の親が黙っていきなり訴えます。そういうことが何件も続くと、親の間から専門の機関に行つて欲しい、という要望が出たり、学校だけで收拾がつかないと教育委員会に電話をかける。私は学校現場を終わって、教育委員会にいるようになって三年目ですが、この三年間だけみても、ものすごく増えてきています。特別支援学級に在籍する子供も増えてきています。

——**学校ではそうした事態にどう対応しているのですか**。

臼木 情緒障害の子供の多くは他の子供との集団での授業が成立しないのですから、その子に合わせた指導をしなくては

なりません。そういう子が一人だけではなく、複数在籍していると、一人が落ち着かなくなると周りに波及して来ますから、そういう子供たちをとり出し指導をする必要が生じてきます。そこでいわゆる特別支援教室の設置ということになります。各学校では対応しきれず、特別支援学級への入級相談も多くなっています。それで特別支援学級が増えてきています。通級指導の情緒障害学級と固定の知的発達障害の特別支援学級があります。通常級に在籍し、通級指導学級に通う子供が多くなっています。

——**特別支援学級が増えるということ**はそれだけ、それを担当する専門職員が必要ということになりますか、その需要は満たされているのでしょうか。

臼木 そこが大きな問題です。私の勤

めている板橋区の場合ですと、小学校五十三校、中学校を合わせると七十七校あるのですが、今はそのすべての学校に特別支援教育コーディネーターという立場の人を置かなくてはならないことになっているのですが、なかなかその確保が難しい。専門家というより、連絡調整役の形になっているケースが多いです。

——**供給する側はどうなっていますか**。

澤 学芸大学の学生は先ほど申し上げた四つの障害領域をすべて一通り学ぶことになっています。ですから障害に関する意識はそれなりにもって卒業して行くといえます。また、東京都の場合は、普通校と特別支援学校の採用試験は別になっています。どちらを選ぶかは学生が決めることになっています。

それでも学芸大の場合は、特別支援学科の卒業生は毎年四十人ほどですからね。しかも学芸大は今や全国区の大学なので、その卒業生も全国に散って行ってしまう。東京に残るのは四十人のうち半分くらいでしょうか。そして採用されて、現場に出て行くのは年間十数人ということになります。そんなことではとても足りない、ということは今の臼木先生のお話を伺っても痛切に感じます。





——供給源が不足しているのですね。他大学などはどうですか。学芸大以外から供給して行かなくてはならないのではないですか。

臼木 学芸大はむしろ少ないです。他大学からの方が多くなっていますね。特別支援教育の需要が高まっています。社会的に認知されてきていますから、他大学などでもそうした教員の養成に力を注ぎ始めた結果だと思います。

澤 少し不謹慎な言い方になるかもしれませんが、われわれにとつては「追い風」が吹いてきた、といえます。それだけ需要が増えてきたということは、養成に力が入りますからね。学芸大の特別支援講座はかつて五十人ほどの定員が

あったのに、どんどん減っていった三十三人にまでなったこともありました。今年ようやく四十人に戻ったところですよ。我々のところは新しい分野で、それだけニーズもある、常々主張してきたことですが、ようやくそういう時代になったと言えるかもしれないですね。どうも自分勝手な言い分のように聞こえるかもしれませんが……。

ところで文部科学省では六・三%という数字を出していますね。いわゆる特別支援を必要とする子供の割合という意味の数字ですが、これは実態と合っておりですか。

臼木 板橋区はもつと多いですね。あの学校ではクラス二十一人のうち六人が個別の対応が必要だ、という報告もあります。六・三どころではないですね。

——話を少し戻しますが、障害児が増えてきた背景について、先生方のお考えを聞かせてください。

臼木 様々な背景があると思います。急に増えたわけはなくて、そういう障害を持った子供が見えるようになった、ということもあると思います。我々の子供のころは「自閉症」という言葉は聞かなかった。でもそういう傾向を持った子供はいましたよね。障害児として扱わな

かったということです。ただ、いろいろな障害を持った子供が増えてきていることは間違いありません。それはいわゆる核家族化が進んで、両親は共働きという生活形態が一般化して、子供にあまり手をかけられなくなってきた、ということは大いだと思います。私は校長の最後が板橋区の金沢小学校というところだったのですが、この地域は生活レベルが大変に高い。親も高学歴で、子供も半数近くが中学を受験して四割は国立や私立中学に進学するような地区でした。ところが障害のある子供も多く、専門機関にかかっている子供も結構いました。言葉づかいもしつかりし、親もしつかりしている、それでも人間関係がうまくいかない、遊び相手が見つからない、という子供もいるのです。常人を超えて勉強はできるのです。学年が進むにつれ安定した生活によつて、人との対応の仕方を学び、改善するのかな、と思うこともありました。

澤 親への対応も重要になってきますね。子供に障害があつても、親はなかなか認められない。認めても小学校の間ぐらいはせめて……とか低学年の間はせめて、とか思っているのではないのでしょうか。

臼木 入学前に学校公開や保護者面談などがあり、相談を受けるその時に子供にとつてどうすることが一番いいのか、

助言のようなこともするのですが、親は簡単には納得しない。教師への苦情になつたりして、問題はつきません、親、さらに学校からの相談に乗るといのが教育委員会指導室での現在の私の仕事です。

澤 子供への対応についてはいろいろな方法論も出てきますが、親をどう納得させるかはまた別の深刻な問題ですね。大学を出てすぐの若い教師にはなかなか荷が重い。

臼木 確かに若い人だと難しい仕事です。ところが経験者もこの仕事を敬遠する人が多くなつてきます。ですから現場では経験五年以下という人が圧倒的に多いのです。

澤 ますます我々の仕事が必要になってきますね。文部科学省が予算をつけて、教員養成プロジェクトとして、すべての学生が特別支援教育を学ぶことにはなっています。今年がその三年目です。その結果特別支援の教員免許を取りたいという学生が増えてきてはいます。ところが現状ではそれが痛し痒しでして、免許を取るには特別支援学校で教育実習をしなければならぬのですが、その受け入れ先不足の問題が生じます。実習生をさばききれなくなる可能性があります。しかし先生のお話をうかがっていると、現場



は実習生の受け入れどころではないのですよね。

臼木 最近、学生ボランティアで入ってくる学生がいます。一回卒業したんだけど、もう一度特別支援教育の免許を取りたくて勉強しています、という学生もいます。こういう人はぜひ欲しいと思います。

澤 最近、民主党政権になって、四十人学級から三十五人学級にすることが議論されていますよね。これは現場としては如何でしょうか。

臼木 教室が足りません。学校の規模によって事情も違いますが、増えたクラスを配置する施設がありません。少人数

クラスならどの子も面倒をみられる、という発想なのかもしれませんが、特別に支援を必要とする子供を取り出して個別に対応できる教室を作ることが先で、そうした学校やクラスを作らなくてはなりません。それが現状では満杯状態です。たとえば中学校は悩みが多いです。小学校の時はなんとか普通学級で過ごしてきたが、中学になったら、固定級、つまり特別支援学級の固定級に入級したいというケースが多く、板橋では一学年にそうした子供が十人以上が入学し、固定学級全体で四十人近い、というケースの学校があります。こうなると個別の対応ができなくなりますから、「助けてくれ」という学校からの悲鳴が上がってきます。

澤 今、システムそのものを変えようという動きがありますが、この問題はもう瀬戸際に来ているということですね。

——特別支援教育の抱えている問題は、幅広く、深い、ということがわかった気がします。両先生、長時間ありがとうございました。



対談 古瀬 政弘氏 × 岩越 敦彦氏

美術教育とは何か

「美術教育とは何か」……掲げたテーマは遠大である。その永遠の課題に敢えて挑んでいただいた。語り合うのは美術科・金工の古瀬政弘先生とグラフィックデザインの岩越敦彦先生。どちらも本学大学院のご出身である。古瀬先生は最近「日本新工芸会員賞」という大きな賞を受賞された。岩越先生も最近「UTカンヌライオンズグランプリ2010」に入選されユニクロで商品化された。お二人ともその分野では第一人者である。しかしである。東京学芸大学で教員志望の学生に「教える」ということは、自らの作品制作とはおのずと違う仕事であるようにも思える。そこで東京学芸大学で教える、とはどういうことなのか、卒業すればその翌日から児童や生徒の前に立つて、図工や美術を教える、という仕事に就かなくてはならない。その「特殊性」のようなものについてお二人に話し合ってもらった。

——最初に先生方が東京学芸大学で教えるようになった経緯について、それぞれの経歴も含めてお話し下さい。まずは古瀬先生から。

古瀬 私の研究分野は工芸です。工芸というと陶芸、染色、漆など様々な素材や技法がありますが、中でも金属工芸を専門としています。技法としては鍛金と、金鍍を用いて制作することを主としています。学生時代にこの分野に出会い、寡黙で頑固そうな金属が、付き合い方次第では少しずつ自分のいうことを聞き、自由に成形していけると惹かれまし

た。また、銅の緑青や鉄錆びの風合いなど時間の経過とともに錆びが自然と落ちていくところは金属が息づいているようにも見え、それも魅力的でした。

もともと制作することが好きでしたので大学院修了後は東京から離れ、石川県金沢市内の工房で制作活動を続けていますが、縁あって平成五年より学芸大学に赴任することになりました。作品面では香立て、花器など実用的な作品を個展やグループ展などで制作発表してきましたが、現在では展覧会発表を中心に器水瓶など古くから人の手の延長として身近に存在してきた道具というものに着目し、自分なりに再度捉え直し、手仕事故

に伝えられる造形表現の可能性というものを探っています。同時に教員養成大学として、自分自身の制作活動や経験をベースに、素材や技術を駆使して創ることの教育的意義や手仕事の身体性からくる学びや人間形成について考えるようになり、制作者の視点から工作・工芸分野の教育の可能性についても研究しています。

——岩越先生はコンピュータを使って表現するという分野ですね。それはどういう経緯でその道に入られたのですか。

岩越 私の専門分野は芸術と工学の二本立てですね。まず、私の絵の才能の発見者は母親で、三歳の時から二科会の先生について習うようになり、小中学校時代はよく受賞しました。家族も客観的に将来画家になるのだろうか？くらいには思っていましたね。いっぽう小学校四年ごろから理科系も好きになり、ラジオの設計製作も趣味のひとつでした。「月刊子供の科学」の発明コンクールで金賞を取ったのは中学一年のときです。

でもどちらかというと、美術のほう

が少し才能がありそうだったので、八王子の多摩美術大学を受けました。工業デザイン学科と絵画学科に同時に合格したことから、悩んだあげく絵画学科に入学し、画家になるスタートをきったのです。

ところが入学して三週間、ゴールデンウィークの前に学生主催の講演会があり、講師は宇佐美圭司という現代美術の先生でした。宇佐美先生は当時、最新の絵画理論を持っていました。「絵画の内因性」ですね。「自分の絵画は、絵画を成立させているすべての根拠が絵画の内側にある」と力説しました。その言葉が、私が今まで受けた美術教育の全く逆だったもので、その日以降一筆も描けなくなったのです。もともとパウロ・クレイのようなキャラクターのある絵を描きたくて美術大学に入ったのに、逆に描けなくなつて課題提出もままならず、最初は半泣き状態でした。

その時私は大学の寮にいたのですが、そこには彫刻や建築など各種分野の学生がおり、いっぽうサークルにはデザイン学科の先輩もいた。彼らの話も参考に、自分に合いそうな先生がいるグラフィックデザイン学科に転科したのです。

デザイン学科のほうでは、ドイツのバウハウスで学んで日本に帰ってから日大芸術学部を作った人の教え子が、多摩



古瀬先生の研究室ホームページ
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~hirofuru/>

自分の専門分野は勿論、ガラス、漆など異素材分野の工芸との横断的な試みや茶道、華道の研修、欧米の工芸

分でカリキュラムを定めて制作研究して行くのですが、この三年間は私にとつてとても貴重な時間でした。

また、工芸制作というものは一人よがりでは制作が進まず、次にどうしようかと常に素材と対等に対話をしながら進めていく必要があります。頭の中のイメージと実際の制作物とは当然多少のズレが生じるわけですが、イメージを追い求めて出来上がって来たら、立体物としてバランスが悪いとかね。

て県内外からの講師とともに自分でカリキュラムを定めて制作研究して行くのですが、この三年間は私にとつてとても貴重な時間でした。

美のデザインの先生をしていて、私はその人につきました。いわば私は、パウハウスの教授だった大好きなパウル・クレーのひ孫弟子になったわけです。その先生は当時すでに自分の手では描かず、人工知能が自分のかわりに描くという、新しい絵画ジャンルを切り開いていました。そこでやっと私は、入学以来の「絵筆が進まない」という悩みから解放されました。さつそく私も東大の大型計算機センターを借りてコンピュータに作品を「描かせ」始めたんです。卒業後はパソ

コンメーカーに入社し、すぐ日経CGグランプリなどに入選しました。そして、今から十年ほど前ですが、私の専門の芸術と工学の両方をまたぐ「情報デザイン」という分野ができ、多摩美からも学芸大からも「情報デザインを教えてください」というお話をいただき、教え始めたわけです。

——古瀬先生は大学院を出てすぐ、大学の教官になられたのですか。

古瀬 いいえ、石川県金沢市内に「財団法人卯辰山工芸工房」という基礎的技術を有した者がさらに高度な工芸技術や表現力を培うための教育機関があり、そこで三年以上制作や理論研究を行いました。そこはガラス工芸、染色工芸、漆工芸、金属工芸、陶芸の五つの部門があり、特に決まったカリキュラムはなく

古瀬 自分の学生時代からすると先生の助言や説明には大変順応性があり、とても器用だと思います。しかし何か問題が生じた時に、自ら解決して行こうとする力が弱いように感じます。逆境に出会ったとき、自分で問題を乗り越えて解決しなければ次に進めない時に、そこで立ち止まってしまふんですね。言われた通りには対応できませんが、制作途中で素材や技法の制約から状況が変化していくと先に進めなくなってしまう。

——今の学生はどうですか。

作家との交流もさかんでした。金沢と言うと伝統的な工芸を連想するのですが、伝統の素晴らしさだけではなく、新しいことに挑戦していく気風もあって、伝統と前衛の両面性が当時二十代だった自分にとつても刺激的でよい環境でした。そこを修了後、学芸大学へ助手として赴任することになったのです。一九九四年頃のことでした。

又、制作の途中で失敗してしまったところをどうするのか、その時に想定しなかったことをどうするか、そういうことを状況に応じて自らの力で判断し、次へ進めることができるように学生諸君を育みたいところです。授業では最初に制作意欲を高めた後、できるだけ進行を見守りつつ、学生一人一人の主体性を尊重するように心がけています。じつと我慢です。ですが、時と場合によっては学生の能力に応じて、こちらからある程度までは仕向けていくこともあります。

要は学生の状況に応じて教員の対応も変化するということです。このあたりは自らの制作活動である素材との対話から、状況に応じて進められていく工夫制作と、教育現場で学生とともに対話しながら進められていく授業とが非常に重なってきます。また作品をきちんと完成させるといふ達成感も大事ですので、課題制作を何とかゴールまでたどり着かせるようにも心がけています。

岩越 デザインを目指す学生は、あまり深く考えずに、自分が好きなもの、流行のもの、作りやすいものを作る傾向があるかも。よほどの天才的アーティストは別ですが、ふつう、食える仕事に結びつくデザインやプランニングには考える筋道が大切です。「意識化できる何かの

制作意図」がなければ一般人向けの説得力はないし、それでは将来役に立たないでしょう。でも、特に最近では、「作りやすいものをデザイン(?)する」という本末転倒が起きやすいんですね。本末転倒という意味ではITに呑み込まれている学生も多い。最近のパソコンはマウスをぐるぐるやるだけで、そこそ面白いものを作り出すのですが、色彩や形体が通常目にする範囲を突破して共感よりも意外性が高くなり、何に使えば良いか、本人もよくわからなかったり。

そこで私は、制作系の授業ではまず何を表現したいかを紙に書かせます。万物なんでもいいから表現したいことをひとつ。第二段階では「なぜこれを取り上げようと思ったか」動機を。次の段階ではそれらを今まで習ったものに結びつけなさいと。例えば「熱帯」を表現したいから温かい赤系を。形は炎のようにしよう。という順序で考えさせる。最後の第四段階ではアイデアスケッチを描きなさい、と。絵のうまい下手ではなく、作品の説明が出来るかを評価する。この四つの段階を踏んでいけば、出来上がったくるものは、狙いが明確な表現になります。食える方向ですね。

でも、それだけではダメです。真面目な学生が筋道どおりに取り組むほど面白



作品名「The Inspilation of a Lamp」コンペのテーマはインスピレーション。エジソンランプをヒントにしている。



岩越先生の作品集ブログ

<http://ameblo.jp/imodesign/>

くない。「見事さの秘密」を考えさせないと。「意外性」と「共感」を同時にもたらず上手な「アイデアの重ね方」ですね。それらを教えることができれば、今の学生の安直な部分も真面目すぎる部分も抑えられて伸びるかな、と思っています。

——両先生とも子供のころから絵を描くことが好きだったり、工作を作るのが好きだったりしたわけで、紆余曲折はあったようですが、結果

的にはその道に進まれた。しかし先生方が教育したこの大学の卒業生は、すべての子供や生徒を相手に図工、美術を教えずにはならなくなる。中には図工の嫌いな子供、苦手な子供もいるわけですが、その問題はどうしたらいいのでしょうか。

古瀬 今の学校での図画工作・美術教育は時間数や制度の問題から「成果主義」の傾向を感じています。作品を作り上げることで達成感や自信を得るとともに、次への意欲などを芽生えさせることはとても大切なことです。それと同時に美術というのはその制作過程、道筋も大事なのです。制作過程での教員の適確な対応によっては、美術が好きになる子供が出てくるのではないのでしょうか。

岩越 そう、プロセスが大事なんですよね。極端に成果主義的な学生は「どんなのを提出したらAがとれますか」などと聞いてきますよ。その場合「いかにアタラしく考えたか、過程も評価されるんだよ」と説明しています。図工、美術に不得意感を持っている子供たちにも、結果もだが、プロセスも大事、というのは励みになるのではないのでしょうか？実は生まれつき絵が好きで、なんだか自然に描けてしまう……というのは、同時に弊害でもあるのです。いつも筆を離さない

絵の虫のような子に「テーマを考えなさい」というとボカンとしてみまう。

古瀬 手を使って描いたり物を作ったりすることは、一つの表現行為でもありますが、その制作過程の中にはたくさんのお考え（試行）を重ねていきます。その過程の中でその子が表現したいと思っていることをどう導き出していかを、共に考えていく必要があると思います。また、美術というと特殊で才能がある人達だけの領域のように捉えられがちですが、この過程を中心に教育を捉えなおすことでいろんなところに絡んでくる。実は幅広い分野なんです。

岩越 そして美術を支える才能も実に総合的ですよ。私の本学での授業には、理系文系問わず色々な専攻の学生が来ます。もう一か所デザインを教えている芸能系専門学校に至っては俳優科やダンス科の学生までいます。その中で、美術から遠い分野の学生が優れたアイデアやセンスやイメージを持っていたりする。美術（たとえば舞台美術）の必要性や、それを取り巻く状況や背景にまで目が届いていることもあり、プランニングはむしろ彼らのほうが強い場合もある。また、物理的強度や、電気など見えない力の扱いは理系が強いでしょう。そんな、美術を利用する人や支える人こそ美術への



より深い理解が必要です。将来アート・パワーを使いこなすためにですね。

——ちょっと刺激的なことを言いますが、義務教育に美術（図工）というのは必要なのでしょうか。諸外国の例をよく知りませんが、図工、美術を全員の児童生徒が学ぶというのは日本の教育の特徴なのではないですか。

古瀬 確かに欧米などでは美術を専門教育として扱っている国もあります。しかし今、学校教育を振りかえった時、人が何か生み出す創造力を育むことに特化している教科は図工・美術ではないのでしょうか？

日々の日常生活を考えると、常に創造力（創意工夫）の必要性は様々な場面で存在しています。図工、美術を通じて育まれた創造力が様々な生活の場面へ関連していき、人の生きる力や生活環境を支えていくのではないかと思います。

また、義務教育の中でこの創造力が様々な教科と関連されていくことで、

教科の枠組みとしてではなく生徒一人一人の立場から見た場合、「学び」としてとても素晴らしいものになるのではないかと考えています。

岩越 古瀬先生の言われるように、美術が生きる力や生活環境を支えていくとすれば、美術こそ、大脳に可塑性が残る中学までに学ぶべきです。同時に鑑賞も大切。「絵を買う人」の多くは「絵が描けない人」なのです。図工が不得手であろうと、将来、人のアートを観ることが自分を取り戻す時間となる人もいます。頭が柔らかかった頃の自分をね。

そしてITも今日、アートが開拓した知性・感性の延長上にあるものです。今、Webがそうですね。いろいろな専門領域が結集した実験の場になっています。また、美術が解るから、本物のあの色を知っているから、高性能な液晶画面も設計する気になる……そんなエンジニアもいるでしょう。また、そのレベルまで顧客ニーズも高まるのだと思います。

——美術教育がいかに重要かというところがよくわかりました。ありがとう、ございました。

「広告小学校」の取り組み 中村和弘（東京学芸大学准教授）

1. 「広告小学校」とは…

広告小学校という実在の学校はありません。小学生のためのコミュニケーション育成プログラムを、「広告小学校」といいます。東京学芸大学と株式会社電通との協同プロジェクトです。

東京学芸大学サイドは、主に附属世田谷小学校が研究拠点として、このプロ

ジェクトに関わってきました。大学と企業との産学連携の取り組みは様々なものがありますが、附属学校がその中核をなす事例は、あまりないように思います。電通サイドでは、社会貢献活動の一環として、総務局社会貢献・環境推進部が主導して活動を推進しています。

このプロジェクトは、2005年から着手され、翌2006年には、現在の「広告小学校」プログラムの第1段階（ユニット1）を完成させました。その後、順次、プログラムの充実を進め、現在では3つのユニットから成り立つカリキュラムを作りあげました。

といっても、実はこのプロジェクトは現在も進行中です。

2009年には全国で12校の小・中学校で実践をいただきました。また、東京、大阪、青森などでも研修会を実施し、多くの先生方に経験をしていただいています。その都度、私たちはプログラムの見直しを行い、よりよいものへと改良を続けていきます。

では、「広告小学校」とはどのような学習プログラムなのか、その一端をご紹介します。

2. 「伝え合っ力」を育てる

学習プログラム

「広告小学校」は3つのユニットから成り立っています。第1ユニットは「入門CM（授業時数／4時間）、第2ユニットは「自分探検CM」（授業時数／6時間）、第3ユニットは「公共CM」（授業時数／5時間）です。学年は特に規定していませんが、小学校の中学年から適していると考えています。実施教科は、「総合的な学習の時間」で多く導入されていますが、地域や学校の実情に合わせて、国語や社会、道徳の時間の活動とし



青森県・下北社会科教育研究会でのワークショップ

でも取り入れられています。

「広告小学校」の特徴は、子どもたちが「コマーシャル」を作りながら、発想力や表現力、グループによる課題解決力を高めていくようにプログラムが考えられているということです。

それぞれのユニットの概略を順に紹介していきます。



第1ユニット「入門CM」

CMの基礎知識やCMの作り方を学びます。友だちと協力し合つて、商品の特徴をどう効果的に表現して伝えていくのか、プログラムの基礎を培います。

- (1) 教材DVDを見ながら、CMの基礎知識やCMの作り方を学びます。
- (2) 「ABCチョコレート」という架空の商品のコマーシャルづくりに取り組みます。チョコレートの特徴である「すごく甘い」ということを、どのような表現の仕方で作ることができるのか、付箋紙を効果的に使いながら考え合います。
- (3) 中心となる表現のアイデアが決まったら、15秒間のストーリーを考え、CM劇として発表します。小道具なども作ります。
- (4) テレビ枠を模したフレームの中で、CM劇の発表をします。発表後には、それぞれ意見の交流をします。

第2ユニット「自分探検CM」

自分自身のコマーシャルを作ることに挑戦します。「コマーシャル」という表現方法を用いた自己表現の場です。

- (1) 教材DVDを見ながら、CMは商品の自己紹介であることを学びます。
- (2) 自分CMを作るために、自分のよさや特徴を付箋紙で書き出します。友だちからもよいところを付箋紙に書いてもらいます。
- (3) 中心となる事柄を選び、自分らしさや自分の良さをCM劇を通して伝えられるようにストーリーを考えます。
- (4) ユニット1と同じように、テレビ枠の中でCM劇の発表をします。

第3ユニット「公共広告」

身のまわりの課題を発見し、原因・理由を突き止めて解決策を考えます。それをより多くの人に実践してもらうために「公共CM」として表現します。

- (1) 教材DVDを見ながら、公共CMとは何かについて学びます。
- (2) 副教材「発見ノート」を使って、身のまわりの問題や課題を見つけ

出します。その中から一つ、「公共CM」作りで取り組む課題を決めます。

- (3) 副教材「解決ノート」を使って、課題の原因を探索し、解決方法を考えます。また副教材「表現ノート」を使って、課題やその原因、解決方法について多くの人に知ってもらうための公共CMづくりをします。

- (4) ユニット1、2と同じように、テレビ枠の中でCM劇というかたちで、自分たちの作った公共CMの発表会を行い、意見を交流します。

3. テレビコマーシャルを教材とする面白さ

もう少し詳しく、広告小学校による授業を紹介しましょう。

ユニット1は「入門CM」を作る学習です。

「今日はね、テレビコマーシャルのベんきょうをするよ」、そう言うだけで子どもたちからは「えーっ」という声にあがります。「みんな、どんなコマーシャルを知っているかな？」と問いかけると、次々と発表していきます。ここまですで、教室は大盛り上がりです。



「広告小学校」のパンフレット



続いて、教材DVDを見ながら、テレビコマーションの表現の工夫について学んでいきます。CMソングやキャラクター、15秒間という長さ、CMが作られる順序など、クイズ形式で出題されますから、クラスのみんなで考えながら楽しめるようになっていきます。

さて、いよいよ「ABCチョコレー」のCMづくりです。「小学生の子どもたちに」「すごく甘い」ということを「15秒」で伝えなければなりません。さあ、どうするか。大人の私たちも頭を悩ますところです。

実はここに、「発想力」を高めようとするこのプログラムの仕掛けがあります。「すごく甘い」ということを、そのまま言っても、相手の印象には残りません。相手に伝わるようにするには、何かしらの「デフォルメ」を施すことが必要になってきます。そこに表現の工夫をこらすための発想力が駆動するようになっていくのです。

「すごく甘い」を、別の言い方で表現してみたり、何かにたとえて言ったりする、誰かのセリフで考えてみる、等々。子どもたちは、とにかく思いついたアイデアを一つずつ付箋紙に書きためていきます。そして、それをグループで持ち寄って、どの表現を核としてCMを作るかを

相談します。

CMのストーリーを作る活動は、子どもたちには意外にお手の物のようで、ここでも様々なアイデアが生まれてきます。4コマ漫画のような絵コンテを描きながら考えていきます。そのとき、常に頭にあるのは、「小学生に向かって」「すごく甘い」ということがよく伝わるように」「15秒」で仕上げるということです。誰に向かって、何のために、どのような条件のもとで表現するか。それらのことを意識し、自分たちの表現活動をモニターしながら活動を進められるようになることも、大切な学習であると考えています。

そして、いよいよ、グループごとにCM発表会です。作ったCMは「CM劇」というかたちで表現します。特注のテレビ枠が用意されていますので、その中でカチンコの合図でCMが始まります。見ている子どもたちからは、「伝えたいことが伝わっていたか」「表現の工夫はどうだったか」などの感想を出してもらいます。こうして凝縮された4時間のユニット1の授業は終わります。

実際に映像としてCMを作るのではなく、「劇」という子ども身の丈にあった表現方法を取り入れているのも、このプログラムの特徴です。映像制作や編集

のスキルがなくても、「劇」ならどの子どもたちにも取り組みます。機材もありませんし、指導する教員の負担もありません。小学生対象の学習プログラムとしては、「CM」としての完成度ではなく、作る過程が問題なのです。ですから、最終的に、映像で表現しようと劇で表現しよう、それはたいした差はありません。だったら、より取り組みやすく、その作る過程に指導のウエイトを置きやすい、「劇」という方法を私たちは選びました。この方針は、ユニット2でも3でも踏襲されています。

4. コマーシャルをしっかりと楽しむ

「ことが「距離」を産む

私自身、実際に授業をしたり先生方との研修会をしたりしながら、プログラムの開発に取り組みました。教室でテレビコマーションを扱うということ自体、子どもたちには驚きです。その驚きは、すぐにたくさん笑いや活発な活動へと変わっていきます。コマーションという子どもたちにとって新鮮な学習材とそれに導かれる学習活動によって、「伝える工夫」について、様々な知恵を絞っていきます。そこには、得意・不得意という隔たりはなさそうです。



広告小学校



「広告小学校」事務局

TEL : 03-6216-8469

FAX : 03-6217-5538

Email: ope298@dentsu.co.jp

http://www.dentsu.co.jp/komainu/

もう一つ、この「広告小学校」の取り組みの面白さは、CMに対してのある種の「距離」が生まれるということでしょう。テレビコマーシャルが様々な人たちによって、様々な工夫をこらして作られていることを子どもたちは知ります。そして、自分たちも「劇」というかたちで表現するためにCMづくりを体験します。そうした学習後には、子どもたちのCMを見る目が少しずつ変わってくると思います。「このCMはこんなことを伝えたいんだな」「このCMはこういうところがよく工夫されているな」、そういう目で見られるようになるということなのです。

こういう状況を、私は「CMに対してのある種の『距離』が生まれる」と表現しています。無意識にぼんやり見ている常態から、意識的に受容しようとする態度に変化したということでしょうか。この変化は、教師から「テレビコマーシャルは気をつけて見なさい」と言われて生じたものではなく、自分たちの学習経験から内発的にひとりひとりに生まれてきたものです。

「広告小学校」はCMが作られる過程に注目し、その過程を子どもたちの学習活動として組織することで、発想力や表現力を高める学習プログラムを開発し

ました。決して、CMに対して批判的な見方ができるようにならうということとを直接の目的として組まれたものではありません。けれど、今、振り返ってみると、様々な活動に楽しく取り組みながらいろいろな力を発揮していく中で、実は結果的に、先に述べたようなCMに対してのある種の「距離」が、子どもたちの中に生まれることになっていったと考えます。

コマーシャルを「しっかり楽しむこと」が、「適切な距離」を生む。そして、この「距離感」の育ちが、実はメディアリテラシーの基盤となる。逆説的に聞こえますが、案外そういうものではないかとこのプログラムの開発に取り組みながら考えています。

5. 「広告小学校」を 実践するためには

「広告小学校」は、教材DVDや様々な副教材(ワークシートやノート)、学習指導案などが

パッケージされており、無償で提供されるようになっていきます。テレビ枠などの小道具も貸し出されます。興味がおありの方はホームページをご覧ください。どうか、あるいは「広告小学校」事務局までお問い合わせください。多くの皆さまのご利用をいただきながら、さらによりよいものへと改善を重ねていきたいと思っています。



CM劇の発表会

平成二十二年 度 理 事 会 報 告

平成二十二年 度 理 事 会 が 五 月 二 十 九

日 午 後 二 時 か ら 定 刻 通 り、大 学 本 部 棟 の 第 一 会 議 室 に お い て 開 催 さ れ ま し た。青 森 支 部 の 種 市 哲 理 事、高 知 支 部 の 山 岡 和 興 理 事 な ど 二 十 人 の 理 事、そ し て 監 事、 さ ら に 特 別 会 員 で あ る 村 松 泰 子 学 長 も 出

席 し て、金 子 義 和 幹 事 長 の 総 合 司 会 で 会 議 は 始 ま り、規 約 に 従 い、鷲 山 恭 彦 会 長 が 議 長 を 務 め て、議 案 の 審 議 に 入 り ま し た。議 題 は、昨 年 度 の 活 動 報 告、今 年 度 の 事 業 計 画、収 支 予 算 を 中 心 と し た も の で し た。

第 一 議 案

役 員 の 選 出 及 び 理 事 会 の 構 成 に つ い て

ま ず、役 員 選 出 で す が、鷲 山 会 長 の も と、白 木 信 子 (社 団 法 人・東 京 学 芸 大 学 同 窓 会 副 理 事 長)、丹 伊 田 敏 (多 摩 大 学 附 属 聖 ヶ 丘 中 学・高 等 学 校 校 長)、山 本 一 雄 (清 水 建 設)、黒 石 陽 子 (東 京 学 芸 大 学 日 本 語・日 本 文 学 講 座) の 四 氏 を 副 会 長 に、佐 藤 郡 衛 (東 京 学 芸 大 学 理 事 副 学 長) ら 十 五 氏 を 理 事 に、中 橋 美 智 子 (東 京 学 芸 大 学 名 誉 教 授)、青 木 登 (元 東 京 学 芸 大 学 監 査 室) の 二 氏 を 監 事 に、金

子 義 和 (三 井 情 報 開 発 株 式 会 社) を 幹 事 長 に、そ し て 顧 問 は 岡 本 靖 正 (元 学 長)、荒 尾 禎 秀 (元 会 長)、長 谷 川 貞 夫 (前 会 長) の 三 氏、そ し て 村 松 泰 子 現 学 長 を 特 別 顧 問 と す る 理 事 会 構 成 員 名 簿 が 満 場 一 致 で 承 認 さ れ ま し た。

第 二 議 案

平 成 二 十 一 年 度 事 業 報 告 及 び 辞 雍 会 入 会 者 総 数 一 覧 に つ い て

「事 業 報 告」は 金 子 幹 事 長 か ら 総 務 部 会 計 部、広 報 部、組 織 部 (第 一、第 二、第 三)、事 業 部 各 部 の 昨 年 度 の 事 業 に つ い て 報 告 が あ り ま し た。

特 徴 的 な 事 業 と し て 「学 生 キ ャ リ ア

支 援 事 業 (教 員 一 次 試 験 対 策 講 座 へ の 経 費 支 援 な ど)、「大 学 等 と の 共 催 事 業 (花 見 の 会、押 井 監 督 を 招 く 会、ホ ー ム カ ミ ン グ デ ー 事 業 と し て の 講 演 会 お よ び 青 森 支 部 紹 介 事 業)」、「大 学 創 立 六 十 周 年 記 念 事 業 (東 京 学 芸 大 学 ア ー カ イ ブ ス の 作 成)」な ど が あ り ま し た。

「辞 雍 会 入 会 者 総 数」に つ い て は 過 去 6 年 間 の 入 会 者 総 数 が 六、五 八 三 人 に 達 し た と 報 告 さ れ ま し た。た だ 新 入 生 の 入

会 は 全 員 加 入 制 で は な い の で 八 割 と 減 少 し て お り、大 学 関 係 者 (教 員、職 員 な ど) の 入 会 率 が 相 変 わ ら ず 低 い な ど の 課 題 が 報 告 さ れ ま し た。

第 三 議 案

平 成 二 十 一 年 度 の 収 支 決 算 書 に つ い て

収 入 額 が 二 八、七 〇 五、八 九 一 円、支 出 合 計 が 二 四、七 五 五、五 七 三 円 で あ っ た こ と が 佐 藤 節 夫 会 計 部 長 か ら 報 告 さ れ、そ の 決 算 に 関 す る 監 査 結 果 が 中 橋 美 智 子 監 事 か ら 行 わ れ、「予 算 及 び 規 約 に 基 づ き 適 正 に 執 行 さ れ て い ま し た」と い う 報 告 (第 四 議 案) と と も に、出 席 全 員 の 挙 手 を も っ て 承 認 さ れ ま し た。

第 五 議 案・第 六 議 案 今 年 度 の 事 業 計 画 と 予 算

今 年 度 事 業 計 画 が 各 部 長 か ら 提 案 さ れ ま し た。

総 務 部 (青 木 久 二 総 務 部 長)

- ① 全 国 代 表 者 会 議、理 事 会、幹 事 会 の 開 催 に つ い て
- ② 大 学 と 辞 雍 会 と の 連 絡・調 整 に つ い て
- ③ 社 団 法 人 の 卒 業 生 組 織 と の 連 携 協 力 (総 会、新 年 会 等) に つ い て
- ④ 新 規 会 員 の 入 会 手 続 き 及 び 名 簿 管 理 業 務 に つ い て
- ⑤ 辞 雍 会 の 組 織 の 在 り 方 等 の 検 討
- ⑥ 規 定 等 の 整 備・見 直 し の 実 施

特 に ⑤ 項 目 の 組 織 の 在 り 方 等 の 検 討 で 「支 部、新 規 会 員 の あり 方 を き ち ん と 整 備 す る 必 要 が あ る」こ と が 強 調 さ れ ま し た。

会 計 部 (佐 藤 節 夫 会 計 部 長)

- ① 予 算 の 適 正 か つ 効 率 的 執 行 に つ い て
- ② 的 確 な 会 計 事 務 の 実 施 に つ い て

広 報 部 (遠 藤 満 雄 広 報 部 長)

- ① 機 関 紙 「辞 雍」七 号 の 発 刊 (秋 の 全 国 代 表 者 会 議 時 に 配 布) に つ い て
- ② ホ ー ム ペ ー ジ の 管 理 と 運 営 に つ い て

広 報 部 員 の ほ と ん ど 全 員 が 交 代 し た。ま っ た く 新 し い 体 制 で 臨 む こ と に な り ま す。鷲 山 体 制 の 目 指 す と ころ に し た が つ て、ホ ー ム ペ ー ジ を 中 心 に、従 来 の 広 報 体 制 を 全 面 的 に 見 直 し た い。年 間 活 動 の 中 で 経 費 と 労 力 を も つ と も 必 要 と す る 機 関 紙 の 発 刊 が、こ れ も 早 晩 さ ま ざ ま な 矛 盾、限 界 を 迎 え る こ と に な る。機 関 紙 の あり 方 の 検 討 も 必 要 だ ろ う。

組 織 部 (筒 石 賢 昭 組 織 第 一 部 長・山 本 晴 信 組 織 第 二 部 長 代 理 前 田 稔 幹 事)

組 織 拡 大 事 業 と し て 行 っ て い く も の。

- ① 支 部 設 立 事 業 に つ い て
- ② 県 別 の 卒 業 生 名 簿 の 作 成 に つ い て
- ③ 卒 業 生 へ の 入 会 依 頼 (一 九 九 六 年 以 降 の 東 京 都 教 員 就 職 者 を 除 く)
- ④ 学 生 委 員 と の 交 流 事 業 に つ い て
- ⑤ 卒 業 生 へ の 記 念 品 の 配 布

事業部（池田克紀事業部長）

一、学生のキャリア支援事業

① 教員採用試験一次試験対策講座

② WORK語り合い（年二回）

③ イマガク（年二回）

④ 企業就職対策講座（「かち就（年十回）」、「ブレイクする（年十回）」）

二、会員支援事業

⑤ 無料法律相談（年六回）

⑥ 法律ゼミ（年十二回）

⑦ 学生企画事業の支援

三、大学との共催事業

⑧ 花見の会

⑨ ホームカミングデーの事業支援

（支部紹介事業を含む）

四、キャンパス周辺散策ガイド

（英訳版ⅡA4版八十六P五百部）

の作成

五、双六復刻版の再版

【1】一〇〇〇部【2】五〇〇部

六、東京学芸大学アーカイブスの作成

池田新事業部長は、従来の事業部活動を発展させ、さらに充実させていきたいと述べたうえで、大学との連携が極めて大事、例えば学生のキャリア支援事業というのは果たして辟雍会だけで行うものなのかどうか、ホームカミングデーも本来大学の主催事業だったはず、主催の主体は大学か辟雍会か、はっきりさせる必要がある、などと強調しました。

要がある、などと強調しました。

これらの課題は、以前から言われてきたことでもあり、同席の村松学長からも「学生課など担当部局ともよく協議して、辟雍会との協力体制をしっかりと築いていきたい」と発言がありました。いくつかの課題も明らかになったうえで、この事業計画案も全会一致で承認されました。

続いて第六議案の収支予算書については佐藤会計部長から予算書を提示したうえで、新規会員の入会者数減少等により、昨年度より約六二〇万円少ない二三八三万六三二八円の収支予算とすると説明がありました。そうした状況の中で、絵双六、キャンパスガイド英訳版の製作を含む事業費が昨年度より一〇六万円ほど多く、事業展開への積極性を打ち出した予算となっています。

この予算案も満場一致で承認されました。これで予定されたすべての議案審議は終わり、辟雍会は鷺山新会長、大学も村松新学長と、ともに新しい体制となってお互い協力体制をしっかりと築いていきたい旨の発言が両者からあって、審議は終わりました。

最後に金子幹事長から、「全国代表者会議を十一月二十日土曜日に開催する

予定」という発表がありました。

今年度から小金井祭が十一月末に開催となり、全国代表者会議もそれに合わせましたが、その後、大学側からホームカミングデーは全国代表者会議と同じ十一月二十日かどうかという提案があ

り、辟雍会として了承しました。この理事会をもつて、鷺山体制は正式に動き出すこととなりました。

（報告・広報部）



新しい都府県支部の設立に向けて

「全都道府県に辟雍会支部を」

それぞれの地域で活躍されている卒業生の皆さんが、相互に親睦交流し、情報交換や大学との繋がりを強めていくことは、私たち自身を豊かにし、これからの教育や新しい文化の形成に貢献していくために、ますます重要になってきています。

辟雍会に入っている学生の皆さんも、卒業して既に3年生を出しています。全国津々浦々で活躍を始めた新卒業生の皆さんがそれぞれの都道府県において集う場が、今、切実に求められています。心おきなく話が出来て、先輩からの多くの示唆や助言を受取り、新しい情報を共有し、いろいろな可能性を探り、励み合う機会をもてることほど、大きな幸せはないでしょう。

辟雍会支部は、現在、北海道、青森県、岩手県、千葉県、富山県、石川県、島根県、高知県の八つの道と県において活動

を始め、卒業生や大学に関係した皆さんのよき交流の場になっています。

新しく、埼玉、神奈川、静岡、新潟、鳥取、大分、鹿児島で支部設立の動きがあります。新潟県では準備会が何度か開かれ、総会の日をどうするかが今議論されており、静岡県の準備会では来年一月二十九日(土)を設立総会と決め、それに向けて取り組みが進んでいます。

「組織化と多様なウイング」

都道府県における組織化とその強化のためには、それぞれの県で卒業生や関係者を把握する必要があります。設立に向けて中心的に動いて下さる方々が各都道府県で情報を収集して下さることが基本ですが、辟雍会本部として、新しく卒業していった辟雍会員を県別に整理する作業、これまでクラブや研究室にあった同窓会から情報を収集する作業を行っています。それらの情報を基礎に、各都道

府県の皆さんの支部づくりやその強化を支援したいと考えています。

こうした動きとともに、学科、専攻、研究室、ゼミ、等々のいろいろなレベルの同窓会も、辟雍会活動として活発化していくことが大切です。

学科や専攻やゼミでは、同学年の人たちはそれぞれに集まりを持っているようですが、異学年を縦に通じた集まりは少なく、とりわけ一九八八年にできた教養系では、創設されて二十二年が経っており、各専攻で卒業生が通じて集まりを一度持ちたいという要望もあります。

また、同学年全体の集まりを持ってみたいという声もあり、例えば、「アフター・ピア」のクラブではクラブ員が各学科・専攻と全学にまたがっていたので、在学中に同学年全体の集まりを呼び掛け、二百数十名の皆さんが生協大食堂に集まった経験を持っています。こうした経験を生かして、同学年の皆さん全体

が集まり、思い出を共有し、未来を語ることも必要でしょう。

「皆さんのご協力を」

辟雍会組織部としては、新しく卒業していった辟雍会員との連携体制をつくること、学科、専攻、クラブなどにある既設の同窓会との連絡を緊密に持つこと、それらの情報を基礎に支部づくりや活動強化を支援すること、この三位一体の組織活動を、強力に展開していきたいと考えています。皆さんのご協力、ご支援を切に期待しております。共にごがんばってまいります。

組織部長 筒石賢昭

山本晴信

役員紹介

臼木信子副会長



社団法人・東京学芸

大学同窓会を代

表して辞職会副

会長職についた

「社団法人・同

窓会」の副理事

長です。一九七〇年

(昭和四十五年) A類体育科卒。卒業と

同時に東京都の小学校教員に採用され、

板橋区に配属されました。以来三十八

年間の小学校教員生活のうち、三十二

年間を板橋区で過ごしたといえます。

二年前、板橋区立金沢小学校校長を最

後に定年退職し、その後は板橋区教育

委員会指導室の学校相談員を務めてい

ます。

——板橋の主みたいな先生だったのですね。

臼木 実はね、生まれも板橋なんですよ。

板橋区板橋で生まれて、小学校は区立

板橋第一小学校でした。それが区立板

橋第一中学校二年の時、父の転勤で大

阪に行き、枚方市の中学校から寝屋川

高校に入学したんです。そこで一学期

だけ過ごしたら、また父の転勤で東京

に帰ることになりました。本当はまた板

橋に住みたかったんですが、東京オリ

ピックの直前で地下鉄が高島平まで延長

になったり、板橋もすっかり変わってし

まって、住むところがない。しかたなく

隣の埼玉県の鶴瀬というところに家を建

ててそこに住むことになったのです。

——江戸っ子から埼玉県人になったわけ

ですね。

臼木 高校一年の夏休みのことですか

ら、高校をどうしよう、ということになっ

て、一年遅れて試験を受けなおさなくて

はならないかと思っていたんです。そこ

で母と一緒に川越女子高を訪ね、校長先

生に事情を話したら「うちの試験を受け

てみなさい」と言ってくださって、たっ

た一人で校長室で試験を受けたんです。

それで合格して、二学期から川越女子高

の生徒になりました。

——有名な受験校で、さぞかし勉強ばか

りしていたんですね。

臼木 いえいえ、バスケットばかりして

いました。中学時代にバスケットを始め、

大阪に行ってもやっていましたから、川

越女子高でも躊躇なくバスケット部に入

りました。その時バスケットボール部の

コーチをしてくださったのが東京学

芸大学の現役選手で、それで進路は自然

と東京学芸大に決まりました。

——大学でもバスケットを……

臼木 ええ、もうバスケット以外にはな

い大学生活でした。実は私はけっこう走

るのも速かったんです。それで陸上部か

ら随分誘われました。当時の学芸大陸上

部は宮本(現姓梶原)洋子さんが、八百

メートルの日本記録を出されて、それは

それは盛んでした。バスケット部の仲間

で陸上に移った人もいたんですが、わた

しは頑としてバスケット一筋……。私の

入ったころの学芸大は、二部にいてどう

しても一部に上がれないんです。それが

三年の時ようやく入れ替え戦に勝って一

部に上がったんです。

——卒業後も板橋区に就職できて、幸運

でしたね。

臼木 故郷で人生を過ごせたということ

ですね。ただ、子供たちを囲む環境は、

どんなに難しい問題が起こってきて、子

供も親も、そして教員も難問を抱えてい

ます。今の仕事はそんな難問の解決に少

しでもお手伝いをする事なので、大変

ですがやりがいのあることだと思ってい

ます。

——辞職会の副会長としての抱負は……

臼木 社団法人同窓会も抱えている悩み

ですが、新規入会者が年々減ってきてい

ます。新しい仲間が増えなければ組織は

発展して行きませんからね。辞職会でも

きて七年目ということなので大事な時

期です。組織をしっかりとさせることの

お手伝いができればいいなと思ってい

ます。社団法人の方はその東京都の教

員を対象にした同窓会なので、辞職会

では他の道府県の仲間、教職以外の職

業に就いた卒業生との交流をどんどん

盛んにしていきたいと思っています。

丹伊田敏副会長



辞職会が設立された

二〇〇三年(平

成十五年)以来

ずっと辞職会の

幹部役員を務め

てこられました。

初代の荒尾禎秀会長

のもとでは理事、そして前の長谷川貞

夫会長のもとでは副会長、鷲山恭彦会

長の代になっても、引き続いて副会長

の要職を引き継がれました。辞職会設

立当初から幹部であり続けた人材は数

少なくありませんので、「歴史的証人」

としても重要な人物です。

現職は多摩大学附属聖ヶ丘中学・高

等学校校長ですが、その前は東京学芸

大学附属高等学校副校長を務めるなど、

母校の学芸大学とは深い関わりを持ち

続けてきました。

昭和四十年（一九六五年）、乙類理科（化学専攻）を卒業してすぐ、都立三鷹高校の教諭になったのを皮切りに、ずっと高校の理科教育に携わってきたのです。その傍らでロンドン大学客員研究員やJICAインドネシア理科教育改善専門家を務めるなど国際的にも活躍、また教科書編集や文部省の学習指導要領の作成にも関わりました。実に多彩な経歴と活発な活動力を発揮する人物です。

——**辟雍会も設立から7年目を迎えました**が、その現状と問題点は何でしょうか。

丹伊田 まず辟雍会はなぜ作られたかという原点が大事です。創立から六十年も経つ大学が、同窓会を持っていなかったというのは異常なこと、と指摘されるかもしれないが、同窓会はもともと古くからあったのです。現在も続いている社団法人同窓会というのがそれです。ところがこれは旧師範時代から続く同窓会で、東京の公立学校の教職員になった同窓生向けに作られています。師範時代にはそれで十分だったのですが、東京学芸大学と言う全国規模の大学になり、さらに教員養成だけではなく、いわゆるゼロメンという、教員以外の職業に就くことを前提にする課程もできました。また国立大学が法人化されて、それまでの文部省管

理の国立大学とは組織的あり様も変わってきました。そこで全国規模の、教職に限らない人も包括した同窓会組織が必要だということになって、前々学長の岡本靖正氏が「辟雍会」の構想を明らかにされました。私はそれにおおいに賛成したわけです。また「同窓会」というと卒業生だけの組織のように受け取られるけれど、大学の教職員は学生よりもはるかに長く大学と関わっている。そうした教職員も構成員にする組織にすべきだと主張して、辟雍会は出来上がったのです。ただ辟雍会という固有名詞はまだ馴染みがないので、いわばその説明用の振り仮名のようなつもりで「東京学芸大学全国同窓会」という括弧をつけた。今になるとこの振り仮名が適切だったかどうか、「辟雍会は同窓会だろう」という声をよく耳にするようになった。つまり大学教職員に認知度が低いし、卒業生の中にも「自分は卒業したのだから自動的に辟雍会会員だ」と誤解している人もいます。辟雍会には会費を支払って入会して初めて会員になるのです。その原点をしっかり確認しないといけない。

——**辟雍会は単なる同窓会ではないわけ**ですね。

丹伊田 その通りです。まず入会の仕方からして、入学と同時に会員になっても

らう。同窓会なら卒業と同時に入会するものでしょう。ところが辟雍会は入学と同時に入会金を支払って会員になるわけです。その入学時に入会した会員がすでに卒業して、いわゆる辟雍会の卒業会員が誕生しました。これは新たな第一歩です。辟雍会はこれから正念場を迎えて行きます。

——**この六年間の辟雍会の活動をどう評価**しますか。

丹伊田 はつきりいつて「足踏み」という感じがします。辟雍会の存在理由がきちんと確立されたわけではない。たとえば支部の設立と言うけれど、それに必要なエネルギーは大変なものです。それはわかっているけれど、思ったほどその数が増えてこない。鷲山会長が支部設立プランを掲げておられるが、私は大賛成です。これができる限りサポートして行きたい。またもうひとつの大事な柱である現役学生の支援も、まだまだ軌道に乗ったとは言えない。大学とは別に辟雍会としてできる支援をしっかりやっていかなくては・・・。それと辟雍会設立以前に卒業された卒業生の組織化はほとんどできていない。どこにどうい卒業生がいるかという情報もつかめていない。やることは限りなくあるように思います。

——**ざっと五十年近く学芸大と関わって**

きて、最近の大学、東京学芸大生についてどんなふうに見ていますか。

丹伊田 大学は社会の縮図といつてもいいと思いますが、最近の学芸大生は大人しい、大人し過ぎると思います。この大人しさはどこから来るのか。自信のなさからくるのかな、とも思います。まず学力に自信がない、自分の資質に自信がない、その自信のなさが何をやっても引いてしまう、という気質を作っているように思います。東京学芸大は、教養系ができたとはいえず、教育系の大学であることに変わりはない。教育を専門にする大学です。もつとその専門に対する自信を持てるようにしなければならぬ、と思います。

——**卒業生は、それぞれの分野で**おおいに活躍し、成果もあげている。そうした卒業生と大学をつなぐパイプに辟雍会がなつてほしい、と思うのですが。

丹伊田 その通りです。地道でも着実にやっていきたいですね。

山本一雄副会長



前期に引き続いて

の副会長就任で

す。副会長職

は二年前の長

谷川貞夫会長の

時からですが、辟

雍会との関わりはそれよりずっと前

二〇〇三年に辟雍会設立が決まった時

から始まり、初代の荒尾禎秀会長のも

とでは幹事長（任期途中で急逝された

池田義人幹事長の跡を継いで）に就任

いたしました。幹事長から副会長へ、

それも二期続けて、となると会社や政

治の世界などでは「とんとん拍子の出

世」となるところですが、辟雍会の場

合は、お祝いよりもまず「ご苦労様です」

という言葉が先にあります。

弁舌さわやか、というわけではありま

せん。どちらかというと口数は少ない

のですが、その適確な判断力は辟雍会

には欠かせない人材です。この普段は

大人しく、冷静沈着にも見える人物が、

実は学生時代はユニバシアード、はて

はオリンピックをも目指そうという体

操選手であったことは知る人ぞ知る、

です。一九七〇（昭和四十五）年、D類

保健体育科卒業。在学中は四六時中体育

館の中にあつて、それこそ東京オリ

ピックを機会に流行語にもなった「ウル

トラC」の技に挑んでいたのです。

卒業後は教員の道に進まず（教養課程、

いわゆるゼロメンのできるずっと前で、

卒業生のほとんどが教員の世界に入つて

行つた時代に）、一般企業に就職します。

自動車のセールスマン、アスレチックク

ラブのインストラクターなどの職を経た

後、大手建設会社・清水建設の「医療福

祉プロジェクト室」と言うところに入り

ます。いわゆるゼネコンと医療福祉：：

といったどのような関連があり、山本さ

んの人生はいかなる展開を見せたのか。

ご本人に伺います。

——最初から教員になる気はなくて学芸

大に入学したのですか。

山本 いえいえ、教員になろうと思つて

いました。高校（都立駒場）の先輩にあ

の陸上女子八百メートルの日本記録保持

者・宮本（現姓梶原）洋子さんがいて、

そのほかにも学芸大に進学した先輩が大

勢いたので、ごく自然に学芸大進学を決

めました。

——それでいつ教員になることを辞めて

一般企業に就職しようと思ったのですか。

山本 四年の四月に父を亡くしてからで

す。僕は戦後間もなく、旧満州で生まれ

ました。母親が苦労して日本に連れて

帰つてくれ、ずっと苦労し続けて僕を育

て、大学まで進ませてくれたのです。そ

の母親を少しでも早く安心させてやりた

くて、教員採用試験よりも日程の早かつ

た一般企業の就職試験を受けたのです。

——それでサラリーマン生活は順調でし

たか。

山本 母親を安心させるはずだったの

に、初任地は東京だったものの一年後か

ら信州、札幌・・・と転々となりました。な

んどか頑張つては見たのですが、やはり

自分に向いた仕事ではないな、と思つ

て会社を辞めて東京に戻ったのです。そ

れからいろいろ職を探したのですが、た

またま大学にほど近いところにアスレ

チッククラブがあり、そこでインストラ

クターを募集しているということを知つ

て、そこに仕事を見つけました。昭和

五十年のことです。ちょうど世の中に「健

康ブーム」のようなものが起こつてきて、

アスレチッククラブなるものができかけ

ていたころです。小金井はその先駆けの

ようなところでした。

——大学での勉強とつながりましたね。

山本 ええ、身体と健康を考える仕事で

すし、ともかくなんでもやりました。水

泳もダイビングも陸上も体操もスキー

も・・・。それこそ赤ん坊から高齢者ま

であらゆる年齢層の人が相手でした。な

かでも水上スキーのデモンストラーター

というのは、かなり本格的にやりました。

——それがどうして建設会社に移ること

になったのですか。

山本 アスレチッククラブでの経験も十

年が過ぎて、自分なりのノウハウも身に

ついてきました。そこで独立しようと思

え、自分でフィットネスのソフトを売る

会社を設立して動き出して間もなく、大

学の恩師から「清水建設が君のような人

材を探している」というお話があつて、

自分の設立した会社の夢はあきらめてそ

ちらに移ったのです。

——山本さんの培われたものはスポーツ、

フィットネスですよね。それと建設会社は

どんな関係があるのですか。

山本 ご存じのように当時のゼネコンと

いうのは成長に成長を続け、いわゆるパ

ブルの象徴みたいな企業でした。清水建

設というのは創業二百年、幕末から明治維新にかけていわゆる洋風建築をあちこちに作って成長した老舗中の老舗です。それが戦後も成長して日本のトップ建設会社の一つになりました。そして建設会社は建物だけ、器だけ作っていいという時代ではなく、その器に何を

入れるかを考えなくてはいけない、という時代になってきたのです。清水建設は理屈っぽく言えば、「人の一生を考える」ということで当時注目されだしていたスポーツクラブ、フィットネスクラブの経営に乗り出したいと考えていたのですね。それで私が選ばれました。そこでの私の仕事はフィットネスクラブのソフトを開発し、そのクラブを運営する会社を支援することでした。平成三年（一九九一年）に浜松町の本社ビルの足元に「アーバン・ハイカーズ・クラブ ゼロイン」という会員制のスポーツクラブをオープンさせたのです。世の中ではこれに前後していわゆる高級スポーツクラブが次々とできて行った時代です。ところが間もなくしてバブルがはじけ、こうした高級会員制クラブというのは立ちいかなくなりました。清水建設のクラブも3年余りで閉鎖されることになったのです。それ

以後は社員の福利・厚生施設としてしばらく存続しましたが、数年後に完全に閉鎖されました。

——まさに世の荒波に揉まれ、洗われ、そしてその中を生き抜いてこられた人生ですね。そのエネルギーはまだまだ衰えませんか。

山本 六十歳を過ぎまして、あちこちに身体の不具合が出てきましたが、まだまだやれます。実は平成四年の法改正で、医療法人が健康増進施設を運営できることになりました。医療と言えば健康を損なった人を対象とするものでしたが、これからは元気な人、健康な人も対象とする施設を持てるようになってきました。健康は人生の永遠のテーマですから、それを軸とした仕事を今後も頑張って進めていきたいと思っています。

——最後に、辟雍会の今後について。

山本 まさにこれからが正念場、スポーツと一緒に。急に技術は向上しませんが、難しい技も地道な努力からできるようにあります。そのつもりでみんなで頑張りますよ。

（山本氏は二〇一〇年八月、清水建設を退職）

黒石陽子副会長



江戸文学、とりわけ近松門左衛門を中心にした浄瑠璃の研究家である。地元

小金井小次郎など江戸の大衆文化にも造詣が深い。

辟雍会と関わることになったきっかけは「東京学芸大学出版会」だった。

大学出版会は大学創立五十周年を期して設立され、様々な出版活動をしてきた。辟雍会との合同企画で「キャンパス周辺散策ガイド」の発行（今年度は英語版の発行）や絵双六復刻版の発行などを手掛けている。黒石さんはその出版会活動をしているところに、初代会長の荒尾禎秀氏から「辟雍会も手伝ってほしい」という要請があった。最初は組織部の幹事であったが、長谷川会長の時代は事業部長ということになった。そして今年、鷺山会長の期には「副会長」という要職に就いた。

「私にできるか不安でした。特に事業部的なことは、企画力もないし、私の苦手とする分野でした。でも自分自身

の勉強になるかなあ、とってお引き受けしたのです。落ち込んでいた時でもありましたし……」。

「落ち込んでいた」というのには、深い事情がある。二〇〇七年五月、ご主人を亡くされたのである。

「大腸がんでした。三年間患って、この間手術も三回したのですが、だめでした。何回入院を繰り返したのかも、よく覚えていないほどです」という。ご主人は四十六歳の若さだった。

「夫が逝ってしばらくは、一日一日暮れて行くのが精いっぱい。浅めの海の底に沈んでいて、海面がすぐ上にあるのに、そこまで上がっていく気力がありません。生きることに関心がない状態でした。かわからないといった状態でした」。

表現はよくわかる気がする。しかし本当のところはご本人しかわからないことかもしれない。それでも国語科の後輩でもある大宅壮一ノンフィクション賞受賞の川口有美子さんの経験と重なり合うような気がする。

「時間というのは限られています。毎日どうしようもなく迫ってくる。そんな時、辟雍会事業部長の話が来ました。これをお引き受けすることで、強引に自分

をそこへ持って行くことができました。いわば、私は辞職会に支えていただいたのです」。

この言葉が示すように、控えめであるが、静かな闘志をたぎらせている人である。

東京・杉並の生まれ。都立富士高から一九七六年、学芸大A類国語科に進んだ。

「学部卒業の時、東京都の採用試験を受けて採用通知もいただいたのですが、どうしてももう少し勉強したくて、修士課程に進みました。一九八二年に修士を終えて、都立高校の教師になりました。東大和、調布南と合わせて十年間、高校教師をしたのです。その後、早稲田の演劇博物館に二年間いて、一九九四年に恩師の小池正胤先生が退官されたのを機に母校の国語科の教官になったのです」。

「今年から副会長という大役を仰せつかりましたが、四人いる副会長のうち学内にいるのは私だけ。大学内部での辞職会の位置づけを確立することがつとめだと思っっています。特に教職員の活動を活性化させるにはどうしたらいいかを真剣に考えたいと思っっています」。

頼もしい副会長である。

金子義和幹事長



辞職会初代幹事長・

故池田義人氏

(二〇〇六年三月急逝) と同級

生だった。大学

に残って数学講座

教授を勤めていた池田氏からの要請で辞職会と関わるようになり、二〇〇三年、辞職会立ち上げの時に監事という役職を割り当てられた。池田初代幹事長は全国同窓会構想と深くかわり、その立ち上げに奔走された。学生時代から長い付き合いの池田氏からたつての協力を仰がれれば、「否」はなかった。勤め先の三井情報開発(株)の幹部社員として金子さんの日常は多忙を極めていたが、辞職会活動にも精力的に関わった。池田氏の後、山本一雄さん(現副会長)が幹事長職を継いだ。二代目の長谷川貞夫会長の時に幹事長に就いた。

「現職の幹事長が、ある朝突然に亡くなってしまった。信じられない気持ちでしたが、友人がエネルギーを注ぎ込んだ辞職会だったので、池田君の遺志を継ぐのが友達の勤めだと思っ、後を

引き受けることにしました」という金子さんは、数学科出身らしい緻密さと冷静さで、幹事長という職責をこなして、もう三年が経つ。だから新役員というより、再任幹事長である。

江戸っ子である。というより「葛飾・柴又の生れよ」と、かのフーテンの寅さんのセリフではないが、まさに葛飾区の江戸川のほとりで育つた下町っ子の典型である。四人姉弟の長男。葛飾区立桜道中学から都立両国高校(芥川龍之介や久保田万太郎などの出身校)に進み、一九六七年(昭和四十二年)学芸大B類数学科に入学した。

「大学時代は山登りに熱中していました。今はない登高会という山のサークルに入っ、それこそ春夏秋冬、山で過ごしたのです。特に上越国境の、百名山の一つである巻機(まきはた)山という山は、われわれにとつてとても大事な山で、そこに山小屋を持つて、清酒「巻機(まきはた)」を醸造している高千穂酒造主催の奉納登山を毎年七月にはしています。それももう二十一回になりました」。山では遭難一歩手前の経験も何度かしたというが、卒業後は三井物産の社内システムセンターから独立した三井情報開

発という会社に入っ。

「大学三年の時でしたか、アポロの月面着陸がありまして、あのテレビ中継を山から下りた新潟・小出の食堂で見っ、あれだけのことがコンピュータの制御で行われている、そのプロジェクトマネージメントに驚きましたね、コンピュータの仕事に就く決心をしたのです」

それから、一貫してプログラマー・システムエンジニアという経験を積み、プロジェクト・マネージメントの分野の仕事が続けてきた。

「ただ、三十歳を過ぎたころ、教師になりたいと思っ始めましたね。中学の数学科教師を目指して採用試験に挑戦したのです。でもちょうどそのころ、中学校が荒れに荒れているので、とても自分には勤まらないと思ってあきらめました」。本当に、人生とは不思議なものである。山に熱中したおかげで、奥さんを見つ(登高会の六年後輩)、中学教師をあきらめたことで、今は会社で百人からの若者を教え、鍛える立場で頑張っている。その経験と組織論は、辞職会の運営にも大いに役立つはずである。

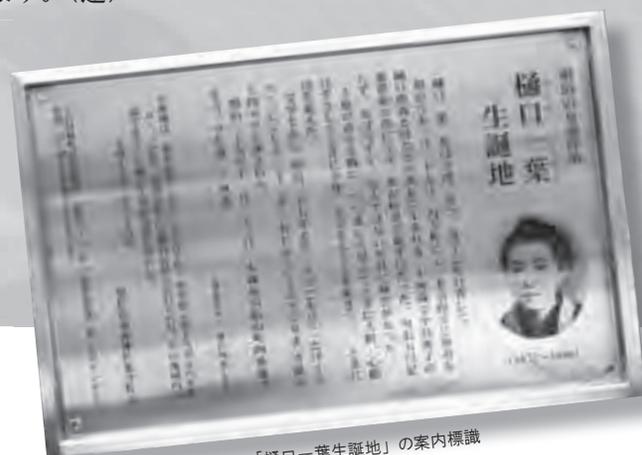
編集後記

「辟雍」第7号をお届けします。7号ということは辟雍会は七年の歴史を刻んだこととなります。歴史と言えば、教育実習の定点観測取材でお世話になった附属世田谷小学校は今年創立百三十五年目になるそうです。百三十五年前とは明治九年のことです。明治六年四月、今の千代田区内幸町一丁目にあった東京府庁敷地内に「東京府小学教則講習所」が開設されました。東京学芸大学の創始です。その三年後に教則講習所は「東京府小学師範学校」と改称され、附属小学校も設置されたのでした。

附属世田谷小のPTA「青山会」では、その機関誌に百三十五年特集を予定しているというので、定点観測取材が終わった直後の日曜日、青山会のお母さんたちと附属小学校発祥の地（つまり学芸大学発祥地）を訪ねる“歴史散歩”をしました。発祥の地は内幸町一丁目四番地、JR山手線の新橋一有楽町間の線路脇、第一ホテルアネックスと千代田区立内幸町ホールのあるあたりです。内幸町ホールの植え込みに「樋口一葉生誕地」という案内標識が建っています。まさに樋口一葉はこの東京府庁内の職員官舎で生まれたのです。明治五年のことです。学芸大、附属世田谷小、樋口一葉はみな同じ敷地内で誕生したのですが、学芸大、附属小の発祥を示す何物もありません（東京府庁跡地を示す標識さえありません）。ちょっとさびしい感じがします。ちなみにこの敷地は東京府庁になるまでは、柳沢吉保で知られる大和郡山藩主・柳沢家（十五万石）の上屋敷でした。東京府はその屋敷をそっくり庁舎にしたのでした。

歴史を跡付ける作業は重要です。そういえば附属世田谷小の第二校歌というべき「藤棚の歌」にこんな一節がありました。「遠い昔の青山のころ……引越す先々ついできた附属の庭の大きな藤の木…」。世田谷小の子供たちは毎日この歌を歌っているのです。

辟雍会はまだわずか七年の歴史です。しかし、今からしっかりと歴史を刻む努力を続けて行きたいものです。この「辟雍」第7号がその一つになればと思います。（遠）



「樋口一葉生誕地」の案内標識

HEKIYOU

辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）機関誌
「辟雍」 第7号

発行日 2010（平成22）年11月20日

発行責任者 鷺山恭彦

編集 辟雍会広報部

事務所 〒184-8501 小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学20周年記念飯島同窓会館内

電話/FAX 042-329-8820

HP www.u-gakugei.ac.jp/-dousou

E-mail dousou@u-gakugei.ac.jp

印刷 株式会社 学校写真

千葉支社 〒274-0071

船橋市習志野4-7-6

電話047-493-9581

北海道「環境授業」報告



大宅壮一ノンフィクション賞受賞
「逝かない身体」
の川口有美子氏に聞く



東京学芸大学全国同窓会機関誌



発行 国立大学法人 東京学芸大学 全国同窓会「辟雍会」

